

「エホバ」という 神の名について考える



「エホバ」という神の名について考える

中澤啓介

序

エホバの証人は、初期（一世紀から三世紀ぐらいまで）のクリスチャンは皆、神の名前を「エホバ」と呼び、その神に信仰を働かせ、祈りをしていて、と信じている。その信仰に基づき、彼らの組織「ものみの塔聖書冊子協会」（以下、組織と略す）が独自に翻訳した聖書『新世界訳』（旧約聖書は「ヘブライ語聖書」、新約聖書は「クリスチャン・ギリシャ語聖書」と呼ばれているが、本小論では、一般に使われている旧約聖書、新約聖書の呼び名で記す）には、神のみ名を表わす「エホバ」という言葉が訳出されている。

この「エホバ」という言葉は、ヘブライ語で「イスラエルと契約を結ばれた神」を表すときに用いられた4つの子音、「ヨード」、「ヘー」、「ヴァヴ」、「ヘー」という四文字（以下、四文字語と略す）を発音したものである。この四文字語は、古代のエダヤ世界では、「ヤーウエ」または「ヤハウエ」と発音されたが、それがどうして「エホバ」と発音されるようになったのか、その発音は正しいのか、ものみの塔組織の中ではどのように扱われてきたのか、イエスは四文字語を発音されたのか、新約聖書にはもともとこの四文字語があったのか、七十人訳ギリシャ語聖書ではどうだったのか、旧約聖書ではどのように扱われているのか等々、神の名「エホバ」をめぐる問題を本小論は取り上げる。

このテーマは、エホバの証人以外の方々にとっては、ほとんど興味のない問題である。しかし、エホバの証人にとっては、信仰の根幹に関わる事柄で、この問題の解明次第でもものみの塔の信仰は立ちもし、倒れもするので、避けて通れない課題である。エホバの証人やものみの塔組織に関わっている方々は、ぜひとも真正面からこの問題に取り組み、自分たちの信仰の真偽性に正しい判断を下していただきたいと思う。

本小論は、テーマごとに章をまとめ、小見出しを掲げ、どこから読んでもよいようエッセイ風を書いてみた。本来学問的に厳密性を要求される課題ではあるが、参考文献を挙げて論ずるといふ学術研究論文のような形にはしないで、誰でも気軽に近づくことができるように書いてみた。テーマ自体はととても重いものであるが、楽しみながら読んでいただければと思う

目次

第一章 「エホバ」と ものみの塔組織.....	3
神名 {エホバ} を使わねばならない?	3
「エホバ」は永遠のみ名?	4
「エホバ」は契約者としての神名.....	5
四文字語の正しい発音は?	6
初期の頃は「エホバ」を重要視していなかった.....	7
「み名をもって呼ばれた民」とは.....	8
第二章 「エホバ」と『新世界訳』.....	9
「エホバ」はどのようにして復元されたのか.....	9
矛盾したことを教えている組織.....	10
新約聖書にはエホバが出てくる回数が少なすぎる.....	11
「エホバ」が一度も出てこない手紙.....	12
第三章 「エホバ」とイエス.....	13
イエスの祈り.....	13
弟子たちの祈り.....	14
ヨハネ 17 章 6 節および 26 節の意味.....	15
イエスの会堂での聖書朗読の問題.....	16
第四章 「エホバ」と一世紀のユダヤ人たち.....	19
ヨセフスの証言.....	19
ミシュナーの証言.....	20
ものみの塔の反論.....	21
ミシュナーの歴史的な価値.....	22
四文字語はどのように発音されたのか。.....	23
第五章 「エホバ」と新約聖書.....	24
マタイの福音書には四文字語があったか?	24
パピアスの証言.....	24
マタイ以外の福音書の場合は?	25
書士によって置き換え作業がなされたか?	26
P46 の写本が提起する問題.....	26
ハワード教授のレスポンス.....	27
第六章 「エホバ」と旧約聖書.....	29
神の名が出てこない旧約聖書.....	29
詩篇 14 篇と詩篇 53 篇の比較.....	30
七十人訳には四文字語がそのまま残されていたのか?	32
ものみの塔の反論.....	33
結論.....	35

第一章 「エホバ」と ものみの塔組織

エホバの証人は、祈るとき「エホバよ」とか、「神・エホバ」などと神に呼びかける。そして、普通のキリスト教会のキリスト者は、「エホバ」という神名を使わないので背教していると考える。まず、ものみの塔組織と「エホバ」の関係について、論ずることにしよう。

神の名【エホバ】を使わねばならない？

『聖書から論じる』は、「まことの神と諸国民の偽りの神々とは異なることを明らかにするためには、神ご自身の名を用いなければ不可能だ」と主張する。「エホバ」という神の名前に言及しない限り、他の偶像の神々との区別がつかないと言うのは本当だろうか？

もし英語で「God」と言えば、聖書を知る人々の世界では、宇宙の創造者、イスラエル民族と契約を結ばれた方、イエス・キリストをこの世界に遣わされた「神」を頭に浮かべるのが普通である。そういう文化的な背景の中で、「God」という言葉が使われてきたからである。

ある言葉が意図する内容・意味は、その言葉がある社会において土着化していくプロセスを踏まえて論じなければならない。確かに日本では、「神」といえば、聖書の神ではなく、日本的な氏神様を想定する人もいるだろう。あるいは、特定の宗教に限定されず、絶対的な存在者、宇宙の創造原理みたいなものを指す場合も少なくない。しかし、キリスト者の仲間の間、教会の世界では、「神」といえば宇宙の創造者、聖書の神を指す。しかも、日本社会全体においても、そう考える風潮にコンセンサスがある。一つの言葉の意味は、多くの人が使っている内容に即して次第に定着していくもので、「神」という用語もまた、同じである。

創世記1章には、四文字語の神名は出て来ない。むしろ、「神（エロヒーム）」という言葉が使われている。この箇所を読んだ人が、「エロヒーム」という言葉が使われているだけで、「エホバ」が出てこないのが偶像の神々とは区別できない、などと言ったらどうだろう。おかしい話になる。むしろ創造の記録では、「神」という表現だけで十分で、「エホバ」などというタイトルが出てこない方が分かりやすい。「神」に名前をつけると、かえって特殊な神、ある種の限定された神になり、聖書の神（宇宙の創造者）から離れてしまう危険性がある。

キリスト者（本小論では、ごく普通の教会に通っているキリスト教徒を指し、エホバの証人は含まない）は、祈るとき「天のお父様」とか、「父なる神様」とお祈りする。イエスが「父よ」と祈るよう教えてくださったからである。ところがエホバの証人たちは、神の名前を使わないと、他の神と間違ったり、偶像などと混同されてしまうと、「エホバ」という神名を使わなければならない、と主張する。本当にそうだろうか？

私たちは、自分の父親に話しかけると、山田さんとか、信男さん、などという呼びかけ方はしない。「お父さん」と呼べば、十分である。だから新約聖書のキリスト教徒たちは、「天のお父様」と呼びかけて祈りを始めた。エホバの証人たちが言うように「天の父、エホバ」などと仰々しく神の名前をつけて呼ばねばならないなどと考えなかった。ローマ8章15節は、キリスト者の心に聖霊が注がれ、その聖霊が神を「アバ父」と呼ばせてくださる、と述べている。

親しく「アバ父」と呼べることこそ、キリスト者の特権なのである。

「エホバ」は永遠のみ名？

『参照資料付き聖書』の付録は、「現代の翻訳者たちが聖書の著者であられる神に加えている最大の屈辱は、その方に特有の固有のみ名を削除している、もしくは覆い隠していることである。」と述べている。エホバの証人は、「エホバ」は永遠の神名だから、必ず使わねばならないと主張する。では、そのことが記されている出エジプト記 3 章 14-15 節を考えてみよう。

すると神はモーセに言われた、「わたしは自分になるところのものとなる」。そしてさらに言われた、「あなたはイスラエルの子らにこう言うように。『わたしはなるという方がわたしをあなた方のもとに遣わされた』」。そののち神はもう一度モーセに言われた、

「あなたはイスラエルの子らにこう言うように。『あなた方の父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神エホバがわたしをあなた方のもとに遣わされた』。これは定めのない時に至るわたしの名、代々にわたるわたしの記念である。

ここでは「あなた方の祖父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」が「エホバ」という名前前で置き換えられ、その「エホバ」が「定めのない時に至る名前だ」と記されている。この聖句を根拠に、エホバの証人たちは、「エホバ」という神名は永遠の神のみ名であり、従ってこのみ名は永遠に使われ続けなければならない、と主張する。

「定めのない時」という『新世界訳』の訳語は、非常に分りにくい日本語である。そう訳されているヘブライ語は「オーラム」で、「永遠」と訳されるのが普通である。とすると、「エホバ」という神名は、ものみの塔が言うように、永遠に使われ続けられねばならないものなのか。答えは、ノーである。「オーラム」という言葉は「永遠」と訳されるのが普通だが、そう訳されても、ほとんどの場合「文字通りの永遠」を意味しているわけではないからである。

例えば、アブラハムへの契約（創世記 17:3, 13, 19）、安息日に関する律法（出エジプト 31:16-17）、日毎の礼拝（レビ記 24:2）などについて、いずれも「永遠」という言葉が使われている。だからといって、アブラハムに与えられた土地と子孫の契約を現代に至るまで有効な契約だと考える人はいないだろう（一部のユダヤ人は別だが）。モーセが啓示された律法や、礼拝形式なども、普通のキリスト者は文字どおりの「永遠」的なものとは理解していない。キリストにある新しい契約までは有効だったかも知れないが、キリスト以降はその縛りの中にはない、と解釈している。

さらに、別の用例を挙げてみよう。イスラエルは永遠に神の民であり（Ⅱサムエル 7:24）、偽りの預言者には永遠のそしりと侮辱が与えられる（エレミヤ 23:40）。永遠の山や丘も砕かれ（ハバクク 3:6）、モアブは永遠の荒地になる（ゼパニヤ 2:9）。このような表現の一つ一つも文字通りの永遠ではない。ある一定の長い期間を指してはいるが、終わりが無いという意味での永遠ではない。

もう以上で十分だろう。これらの使用例は、「オーラム」という言葉を「永遠」と訳するのが慣例であるが、それは文字通りの「終わりのないずっといつまでも続く時間」という意味ではない。むしろ、「永遠的な」というニュアンスで、ある一定の長い期間を指した表現である。その期間がどれぐらいかは文脈より判断する以外にない。

神名の「四文字語」が「永遠の神の名」と言われているのは、神がイスラエル民族と契約を結

ばれたという文脈の中で語られたものなので、イスラエルの民にとってその契約が有効である限り使うべき名前だったのである。

「エホバ」は契約者としての神名

「エホバ」がイスラエルの民と契約を結んだときの神名であることを、出エジプト記 6 章のはじめの部分から確認しよう。

神はモーセに、イスラエルの民をエジプトから解放すると言う重大な使命を託された。しかしモーセはそのとき、自らの無力さを自覚し、もし同胞の民から「あなたを派遣した方とはいったい誰なのか」と尋ねられたら、何と答えてよいのか分からなかった。そこでモーセは、自分を派遣した方について「その名は何であるか」と尋ねられたら、何と答えたらいいのか、と神に尋ねた。ここで、「その名は何であるか」の「何」は、「誰」を意味する「ミー」ではなく、何を意味する「マー」である。ということは、民は、モーセを派遣した方の実態を問うている、ということになる。

それに対し神は、わたしはエホバである。そしてわたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに対し常に全能の神として現われたが、わたしの名エホバに関しては自分を彼らに知らせなかった。(出エジプト 6 章 2 節・3 節)。

この神からの回答は、アブラハム、イサク、ヤコブなどの族長は「エホバという神名を知らなかった」と言っているかのように見える。むしろそのような理解は間違っている。アブラハムは「エホバのためにそこに祭壇を築いて、エホバの名を呼び求め」ているし(創世記 12:8)、それよりはるか昔、エノシュが生まれた頃から、人々はエホバのみ名を呼びはじめていたからである(創世記 4:26)。実際族長たちは、エホバ(四文字語)という名前を知っていたし、使っていた。

このような一見矛盾に満ちた問題が生じるのは、「知る」という言葉を正確に理解していないところから起こる。ヘブライ語の「ヤダー(知る)」は、単に知識として知っているということではなく、その言葉が指し示している内容を体験しながら認識する、という内容を意味する。この点を、出エジプト 6 章の流れを追いながら読み取っていくことにしよう。

まず 3 節で、神はアブラハムをはじめとする族長たちには、み名を知らせなかったと言われる。

続いて 4 節では、神は族長たちに契約を結ばれたことを述べ、続く 5 節では、神はこの契約を今思い出したと言明する。

続く 6 節から 8 節は、一つのまとまりを持った文章である。『新世界訳』では「わたしはエホバである」という言葉ではじまり、その同じ言葉で締めくくられている(ヘブライ語も同じ)。これは古代中近東の契約文書の書式である。つまり、はじめと終わりに契約者の名前を掲げ、その間に契約内容を挿入させるという書き方である。すると、契約者が「エホバ」であり、その契約文が 6-8 節に記されている、ということになる。

以上のことから、「エホバ」という神名は、エホバが「イスラエルの民が約束の地で神の民として生きるという契約」を結ばれたときの契約者名なのである。もし「エホバ」という言葉(四文字語)が、イスラエル民族と契約を結ばれた方の神名であれば、その契約の受け手であったイスラエルの民が使うことはまことにふさわしい。しかし、イスラエルの民との契約に無

関係の今日のキリスト者たちにとっては、「エホバ」という神名は無縁なのである。キリスト者とは、キリストが新しい契約を結ばれた民なのだから、キリスト者にとっての契約の相手は「エホバ」ではなく、キリストなのである。

四文字語の正しい発音は？

普通のキリスト者は、四文字語「エホバ」という神名を使わねばならないとは考えていない。従って、四文字語をどのように発音するかは大きな問題にはならない。しかし、エホバの証人は神のみ名を呼ぶべきだと主張している以上、正しく発音することはきわめて重要なことである。

今日、四文字語を「ヤーウェ」または「ヤハウエ」と発音したことについては、学者の間に異論はない。従って、もしエホバの証人が神の名を発音すべきだと言うのであれば、「エホバ」ではなく、「ヤーウェ」または「ヤハウエ」と発音すべきである。

ところがものみの塔のリーダーたちは、四文字語を「エホバ」と発音しようが、あるいは「ヤーウェ」と発音しようが、大した問題ではない。それはイエスのことをギリシャ語で「イエスース」、英語で「ジーザス」、ラテン語で「イエズス」と、異なった発音をするのに等しい、と反論する。

しかし、これは次元の違う比較である。もし日本語の「エホバ」に対し、英語で「ジェホバ」と発音されるような違いを問題にしているのであれば、この比較は的を得たものである。しかし、「エホバ」という発音は、歴史的に言えば、ユダヤ人たちの誰一人として発音したことのないもので、このような類比は当たらない。

実は「エホバ」という発音は、もともとヘブライ語では存在しない言葉だった。従って、そういう発音の言葉は、ユダヤ人の世界では存在しない。実は、「エホバ」という発音は、十二世紀頃の学者があることを勘違いして作りあげてしまったものだった。というのは、当時四文字語は昔からのユダヤ人の伝統に従い、「アドナイ」と発音されていた。その学者は、子音だけの四文字語に対し、「アドナイ」につける母音符号を間違えて付けてしまったのだ。その結果、四文字語とそれとはまったく無関係な「アドナイ」の母音符号が合体することによって、全く新たな言葉「エホバ」が出来上がってしまった。つまり「エホバ」という読み方は、偶然から生じた人造語なのである。

ヘブライ語の世界では、同じ子音文字であっても、母音符号の付け方が違うと当然発音が変わり、意味が全く違ったものになる。例えばここに、ヘブライ語の「シュバ」と「ダレトゥ」という二つの子音文字がある。これに「ア」という母音符号が付ければ「シャド」となり、意味は「乳首」となる。もし「エ」という母音符号を付ければ「シェド」となり、意味は「悪魔」となる。「オ」という母音符号を付ければ「ショド」となり、意味は「胸」になる。このように同じ子音文字に違った母音符号をつけると、発音が異なり、意味が違ってしまうのだから、子音と母音を勝手に切り離したり、合体させてはいけないのである。

もし神がご自身の民にその名を永遠のみ名として呼んでもらいたいと本当に願っておられるなら、アブラハムやモーセ、イザヤやエレミヤが発音したと同じような発音を求められるであろう。もしエホバの証人が神のみ名を使うべきだと言うのであれば、どのように発音するかという問題をいいかげんにしてはならない。ものみの塔の文献さえ、四文字語が「ヤーウェ」

または「ヤハウエ」と発音されてきたことを認めている。しかし、長い間「エホバ」と発音し、親しんできたのだから、今さら変える必要はない、と開き直っている。これは歴史の事実に対するとても不正直な態度である。歴史の知識が乏しかったがゆえに間違えることは誰にでもある。大事なことは、間違いが分かったら、直ぐにそれを認め、間違いを訂正することである。

初期の頃は「エホバ」を重要視していなかった

ものみの塔の組織は、その歴史のはじめから「エホバ」という神名を重要視していたわけではない。「エホバ」という神名が特別な意味を持つてくるのは、1931年以降のことであって、1879年から1931年の初めの53年間は、そうではなかった。

ものみの塔は、イエスが1919年ごろすべての宗教団体を調べた結果、ものみの塔だけがエホバ神への正しい信仰をもつグループだと確認された、と教えている。イエスは、そのときのエホバの証人たちを「思慮深い忠実な奴隷」(マタイ24:45)としてお認めになったというのである。

ところが、その1919年の頃は、ものみの塔組織は神名「エホバ」を特別扱いしていなかった。それは、1919年4月15日号の『ものみの塔』誌を読むと、「エホバ」という名前は一度出てくるのみということを見れば分かる。もし最近の『ものみの塔』誌を見て、「エホバ」という神名を数えるなら、80回以上は出てくるはずである。

もし1919年の頃、ものみの塔のグループが神名「エホバ」を重要視していなかったとすれば、イエスがすべての宗教団体をご覧になったとき、「エホバ」という神名を使ったかどうか、まことの神の民かどうかを決定する決め手ではなかったことになる。これは現在のものみの塔組織が教えていることと異なる。

ラッセル時代のものみの塔のグループは、「国際聖書研究者同盟」と呼ばれていた。ラッセルはこの名称に大きな誇りを持っていた。『ものみの塔』誌1882年4月号(7-8頁)は、創設者ラッセルはこの名前以外の名をつけることは結局セクト主義に陥いと警告し、他の呼称で呼ばれることを拒否している。実は、ものみの塔の組織が自分たちに「エホバの証人」という名前を採用したのは、1931年のものみの塔の大会のときだった。その時までは、「エホバ」という神名は、ものみの塔の組織の中においては重要視されていなかった。

ものみの塔は、一世紀のクリスチャンたちは「み名をもって呼ばれた民」で、「エホバ」を使っていたが、三、四世紀以降の教会になると背教が起こり、「エホバ」という神名が使われなくなったと説明する。ところが、ものみの塔の歴史の最初の半世紀においては、「エホバ」という神名は特別な意味をもっていなかったのである。実に奇妙な話ではないか。

1901年に翻訳された American Standard Version という聖書は、旧約聖書における四文字語を一貫して「エホバ」と訳している。ものみの塔はこの聖書を重要視し、1944年にこの聖書を印刷する権利を取得した。にもかかわらず組織は、『新世界訳』を出版するまで英語欽定訳聖書(King James Version)を公認聖書として使っていた。この欽定訳聖書では、「エホバ」は4度しか使われていない。もし今日のものみの塔が主張するように、神名「エホバ」を使うことがそれほど重要なことだとしたら、ASVの訳を欽定訳の代わりに採用すべきだったのだ。

「み名をもって呼ばれた民」とは

使徒の働き 15 章 14 節には「み名をもって呼ばれる民」、そして 15 章 17 節には「わたしの名で呼ばれる異邦人」という表現が出てくる。むろんものみの塔のリーダーは、この「み名」をエホバと理解し、初代のクリスチャンたちは「エホバの証人」だったと主張する。はたしてこのような解釈は正しいのか？

弟子たちの伝道を記録した「使徒の働き」という書物では、「エホバ」というみ名は全く問題にされていない。この 15 章はエルサレム会議を記録しているが、この会議においても「エホバ」という神名はいっさい出てこない。ペテロは 7、8、10 節で、ヤコブは 14、19 節で神（セオス）と呼んでおり、「エホバ」についての言及はない。もしイエスの弟子たちが誰かの名を問題にしていたとすれば、それは「エホバ」ではなく、「キリスト」だったのである。

使徒の働き 11 章 26 節は、アンティオキアにおいて初めて、イエスの弟子たちが「クリスチャン」と呼ばれるようになったと伝えている。「クリスチャン」とは「キリストに属する者」という意味である。イエスの弟子たちはキリストに属するのであり、キリストのみ名をもって呼ばれた民だった。しかもこの「クリスチャン」というタイトルは「神慮によって」（『新世界訳』）与えられたのだから、とても重要だった。キリストと契約を結んだ民は「クリスチャン」と呼ばれることで十分であり、「エホバの証人」などという呼び名は不要だった。

エホバの証人は、エホバを「神」、「父」、「天の父」と呼ぶだけでは不十分であると考え、常に「エホバ」という言葉を付け加えて、「私たちの神、エホバよ」とか、「エホバよ」などと呼びかける。しかしエホバの証人たちは、神に対して「主」という言葉をほとんど用いない。「主」という言葉は『新世界訳』においてさえ 500 回近く使われている。それに対し「エホバ」は 237 回だから、倍以上言及されていることになる。それでも「主」という言葉を避けるのは、イエスを「主」と告白する信仰が希薄だからである。

エホバの証人たちは、イエスに関しては、祈りの終わりの時に「イエスのお名前をとおして」と付け加えること以外、ほとんど言及しない。これは明らかに新約聖書に見られる信仰とは異なる。新約聖書においては、イエスは「主」と告白され、信仰の対象として大変重要な位置を占めている。イエスは信仰の対象そのものである。さらにイエスは賛美され、礼拝され、祈られている。現在のエホバの証人たちの信仰におけるイエスの位置はあまりに小さく、新約聖書のそれとはかけ離れている。これは「エホバ」を強調するあまりの反動であろうか、それともキリスト教世界との違いを鮮明にしようとした結果だろうか。いずれにしろ、キリスト信仰ではなくなっている。

第二章 「エホバ」と『新世界訳』

ものみの塔聖書冊子協会は、独自の翻訳聖書『新世界訳』を出版している。この翻訳は、原典のヘブライ語やギリシャ語から忠実に字義訳をした聖書ということになっているが、それは全く違う。確かに、字義訳的に訳されている部分もあるが、日本語訳は英語訳からの重訳であり、組織の主張を色濃く反映した翻訳聖書である。では、この『新世界訳』において、「エホバ」の神名がどのように取り上げられているかという点について考えてみよう。

「エホバ」はどのようにして復元されたのか

ものみの塔の統治体の元メンバーだったレイモンド・フランツは、『良心の危機』という書物を出版しているが、その中で『新世界訳』の英訳がどのように出来上がったかを明らかにしている。この聖書の翻訳委員会は、三代目会長のネイサン・ノア、四代目会長のフレデリック・フランツ、五代目会長ミルトン・ヘンシェル、それにアルベルト・シュローダー、ジョージ・ギャンガスの5人の統治体メンバーによって構成されていた。これらの翻訳者の中で、聖書原語であるギリシャ語やヘブライ語ができたのはフランツただ一人だった。彼は大学で2年間のギリシャ語教育を受けていた。またヘブライ語に関しては独習したようである。

この翻訳委員会は、新約聖書のギリシャ語原典（現在は写本しか残されていないので、原典は本文批評学という学問的手法による復元作業によって手にすることができる）には四文字語が一か所も出てこないにもかかわらず、『新世界訳』聖書においては237箇所「エホバ」という言葉を訳出（挿入）した。では何を根拠にそのようなことをしたのか。

『参照資料付き聖書』（1757-58頁）は、237箇所のそれぞれがどのような資料に基づいて復元されたかを詳細に伝えている。そこで紹介されている資料は、「エホバ」の「エ」という文字で表現されている。その資料は、新約聖書のギリシャ語原典の写本ではなく、ヘブライ語に翻訳された新約聖書がほとんどである。しかも、ものみの塔協会が、「エホバ」という神名を訳出するために参考にしたヘブライ語の新約聖書の中で一番古いものは、「エの2」と呼ばれるもので、1385年に出版されたものである。つまり、一番古い資料であっても、新約聖書が書かれてから、1300年も経過したものだ。しかもこの「エの2」という資料は、新約聖書のすべての書物（27冊）を含んでいたわけではなく、ただマタイの福音書のみである。

『参照資料付き聖書』が挙げる次に古い資料は「エの3」で、「エの2」から150年後の1537年に出版されたマタイの福音書とヘブル人への手紙のヘブライ語訳の書物である。

その次に古いものは「エの4」で、1551年に出版されたもので、これもマタイの福音書のみである。実はこれらの「エの3」と「エの4」とは、一番古い「エの2」の改訂版に過ぎない。しかもこの「エの2」という資料は、キリスト教に反対するため、ユダヤ人によって出版されたものだ。従って、これらの訳において、ギリシャ語の「キュリオス（主）」や「テオス（神）」という言葉に四文字語を当てたのは当然のことだった。とくに旧約聖書からの引用の場合は、もともと四文字語があったわけだから。

「エの7」（1599年出版）は後に「エの8」（1661年出版）として、さらに「エの10」の一部（1798-1805年出版）として改訂されてゆく。

ロンドンのユダヤ人協会は「エの 11」(1817 年)、「エの 13」(1838 年)、「エの 16」(1866 年)をそれぞれ出版した。これらの翻訳者たちは「エの 14」(1846 年)と「エの 15」(1853-1867 年)の出版の準備にも関わった。ということは、「エの 11」、「エの 13」、「エの 14」および「エの 15」はみな関連があるということになる。従って、ひとかたまりとして扱うのがよい。

『新世界訳』が「エホバ」を補うために参照した資料は全部で 22 あった。これらのうち、新約聖書のすべての書物を含んでいるものは 11 だった。これら 11 のうち、「エの 7」と「エの 8」は関係があり、「エの 11」「エの 13」「エの 14」「エの 16」はそれぞれ関係があるので、結局 7 つとなる。しかもこの 7 つの中には、1975 年版、1979 年版、1981 年版のものまで含まれている。

更に続けよう。使徒 18:21 とヤコブ 2:23 は「エの 17」が基になっている。それは、なんと 1981 年に出版されたものである。使徒 13:44 に関しては「エの 17」と「エの 22」があげられている。これらもまた、1981 年と 1979 年のものである。コロサイ 3:13 は「エの 23」に基づいており、1975 年のものである。それに比べ、I コリント 7:17 では一つの資料も挙げられていない。翻訳委員会が挿入したらよいと思ったので挿入してしまったもので、資料を一つもあげることのできない、組織が全く勝手に付け加えたものである。

さらに、I テサロニケ 4:16 では、「エの 7、8、13、14」に基づいて『新世界訳』は「エホバ」と訳出した。次節の 4:17 でも同じで、それらに「エの 24」の資料を加えている。また、II テモテ 1:18 においても、「エの 7、8、13、14、16」に基づき、「エホバ」と訳出している。

ところで、I ペテロ 3:15 の「エの 7、8、11-14、16、17、24」の資料においてはいずれも四文字語となっている。ところが、I ペテロ 3:15 では「エホバ」とは訳出していない。もしこの箇所において、ヘブライ語訳の新約聖書に基づいて「エホバ」と訳出してしまうと、キリストが「エホバ」になってしまう。これでは具合が悪いから、『新世界訳』は「エホバ」とは訳さず「主」と訳したわけである。つまり『新世界訳』は、ヘブライ語に訳された新約聖書において四文字語が出てきたとしても、自分たちの教理に都合が悪い場合には、「エホバ」と訳出せず、「主」と訳したわけである。

以上のことから、『新世界訳』が「エホバ」という言葉を訳出する根拠になっている資料は、翻訳の世界（あるいは原典を確認する作業においては）では全く使うことのできないものばかりである。エホバの証人はこの事実を知り、次の啓示 22:19-20 の警告を真剣に受け止めるべきである。

「わたしは、すべてこの巻き物の預言の言葉を聞く者に証しする。これらのことに付け加える者がいれば、神はこの巻き物に書かれている災厄をその者に加えるであろう。また、この預言の巻き物の言葉から何かを取り去る者がいれば、神は、命の木から、また聖なる都市の中から、すなわち、この巻き物に書かれているものから彼の分を取り去られるであろう。」

矛盾したことを教えている組織

『新世界訳』の翻訳委員会が（実際には、フレデリック・フランツが一人で翻訳したのだから、委員会と言うにはふさわしくないであろうが）、「キュリオス（主）」や「セオス（神）」という言葉が出てくる箇所に「エホバ」という言葉を訳出したことは、組織が「聖書の原典は今日まで正確に伝達されてきた」と教えていることに矛盾する。

実はものみの塔組織もまた、今日私たちが手にしている新約聖書のギリシャ語原文は、靈感を受けた聖書記者によって記された原典とほぼ同じものだと考えている。『洞察』（二巻 10 頁）には、次のようなフレデリック・ケニヨン卿（19 世紀の最高の新約聖書ギリシャ語研究者）の言葉を引用している。

「聖書は実質的には、書かれたとおりに我々のもとに伝わってきた、ということに対する疑いの最後の根拠は今や取り除かれた。新約聖書の各書の信ぴょう性も全体として元のままの形を保っている点も最終的に確証されたと見なすことができるであろう。」

ものみの塔の出版物が、このようなケニヨン卿の言葉を引用するということは、ケニヨン卿たちが進めてきた「本文研究」という学問を認め、その成果に基づいて回復されたギリシャ語原典の本文を受けいれている、ということである。実際ものみの塔は、1800 年代半ばのウエストコット・ホートの研究成果を受け入れ、『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』という書物を組織の出版物として出版している。

ところで、今日の聖書の本文研究家たちは（むろんここには、ケニヨン卿や、ウエストコットやホルトというギリシャ語研究者たちも含まれる）、多くの写本を比較検討した結果、いまだギリシャ語聖書の原典に到達していないかも知れない部分は新約聖書全体の 1000 分の 1 ぐらいであり、99.9 パーセントまでは原著者の文章を復元できたものと考えている。その残り 0.1 パーセントとは、句読点をどこに打つか、あるいは「カイ（そして）」という語を入れるべきかどうか、といったほんの些細な点にすぎない。「キュリオス（主）」とか「セオス（神）」という言葉が四文字語に置き換えられる可能性など、全く含まれていない。

一方では、本文研究家フレデリック・ケニヨンの言葉を引用して、新約聖書の写本は正確に伝達されてきたので、本文はほとんど完全に復元されていると述べながら、他方では、いかなる写本の支持もない四文字語が原典にあったとして挿入する（あるいは改変する）ことは、全く自己矛盾に満ちている。もし『新世界訳』がしているように、写本の証拠はなくても「エホバ」という神名を訳出したいのであれば、本文研究家ケニヨン卿の言葉などは引用せず、彼は全く間違っていると、真っ向から否定すべきだったのだ。

『新世界訳』が「エホバ」と訳出している 237 箇所は、ギリシャ語原典ではほとんどが「主（キュリオス）」、または「セオス（神）」で表示されている。ギリシャ語の 5,000 以上の写本はいずれも、このことを明快に証言している。さらに、他の古代語訳の 6,000 にのぼる写本も、である。

では、旧約聖書において四文字語で表わされていた神名が、なぜ新約聖書では「主」とか「神」という言葉に置き換えられたのか？ それは、初期のキリスト教徒たちの間に、四文字語が示唆する神名はユダヤ人と契約を結ばれた神につけられた神名であるという理解が広まっていたからである。ユダヤ人のキリスト教徒も、異邦人のキリスト教徒も、自分たちと新しい契約を結んでくださった方に対しては、四文字語で表現しなかった。むしろ、四文字語にこだわらず、「キュリオス」とか「セオス」という言葉をあてがうことに何のためらいもなかったのである。

新約聖書にはエホバが出てくる回数が少なすぎる

新約聖書のギリシャ語原典には、本来一度も四文字語（「エホバ」という神名）は出てこな

い。でも今は百歩譲って、『新世界訳』の翻訳委員会の推測が正しく、もともとの原典には 237 箇所において「エホバ」という名前が含まれていたとして議論を進めよう。

まず、旧約聖書には、『参照資料付き聖書』（1753 頁）によれば、四文字語は 6981 回出てくる。新約聖書の分量は、旧約聖書に比べ三分の一ぐらいである。もし新約聖書の著者たちが旧約聖書の著者たちと同じぐらいエホバ神を崇めている人々であったとすれば、新約聖書には 2300 回ぐらい四文字語が出てくることを期待してもよい。

しかし、『新世界訳』の翻訳委員会は、237 箇所にしか「エホバ」という言葉を挿入していない。これは、期待される量の十分の一である。しかも、その大半は旧約聖書からの引用、もしくは旧約聖書がらみの文章においてであった。つまり新約聖書の著者たちは、普段の生活においては「エホバ」という呼び名をほとんど使わなかったことになる。今日のエホバの証人たちが「エホバ」という名前を使っているような頻度数を新約聖書の著者たちが使っていたとしたら、おそらく新約聖書には 1 万回ぐらいは「エホバ」が出てきて不思議ではない。

「エホバ」が一度も出てこない手紙

エホバのみ名を復元したとされる『新世界訳』においてさえ、ピリピ人への手紙、テモテへの手紙第一、テトスへの手紙、ピレモンへの手紙、3 つのヨハネの手紙には、「エホバ」のみ名は一度も出てこない。エホバのみ名を使わなければ、エホバを崇めていないと考えるエホバの証人は、このような手紙が新約聖書に存在すること自体、おかしいことだと考えねばならない。

今日のエホバの証人が、外部の人ではなく会衆の仲間に、便せん 5-6 枚の手紙を書いたとする。そんなとき、ただの一言も「エホバ」というみ名にふれない手紙など書くだらうか。とても考えられない。あるいは、統治体から日本支部や会衆の長老、王国会館に送られてくる手紙の中で、一度も「エホバ」のみ名が使われていない手紙などあるだらうか。お調べになる必要もないことだらう。

ものみの塔によれば、新約聖書の著者たちは、エホバを信じ、エホバを愛している靈感を受けた人々である。そのような聖書記者が、エホバを愛し、エホバの名前を使わねば神を敬ってはいないと信じる 144,000 人に宛てた書物において、そのはじめの挨拶にも、終わりの祝福の祈りにも、会衆のさまざまな問題を解決する指針においても、一度も「エホバ」のみ名を使わなかったのは、ものみの塔の立場に立てばどう考えても不自然である。

第三章 「エホバ」とイエス

イエスの祈り

エホバの証人は、祈りにおいて神に語りかけるときは「神・エホバよ」とか「エホバよ」と「エホバ」の神名を使うべきだ、キリスト教世界のキリスト者は「エホバ」を使わないので聖書の信仰から逸脱しており背教している、と主張する。もしエホバの証人の言うことが正しければ、イエスは「エホバよ」と祈られたであろうし、そう祈るよう教えられたはずである。果たして実際はどうだったのか。

イエスが祈られた出来事は、四つの福音書のあちらこちらに記されている。その中の一つに、イエスが処刑される前夜にささげたかなり長い祈りがヨハネの福音書17章に記述されている。いったいそこでは、イエスは神に何と呼びかけて祈っているのだろうか？

1節、11節、21節、24節、25節をじっくり見ていただきたい。いずれも、エホバの証人が期待する「エホバよ」とか、「神、エホバよ」などという語りかけではない。「父よ」という、何の飾り言葉もつかないごく親しい語りかけだった。

イエスのこの「父よ」という呼びかけの祈りは、他の箇所のイエスの祈りにおいても一貫している。例えば、マタイ 11:25、11:26 (ルカ 10:21)、26:39 (マルコ 14:36、ルカ 22:42)、26:42、ルカ 16:27、23:34、23:46、ヨハネ 11:41、12:27-28 などである。イエスの祈りにおいては、他の呼びかけ方は存在しない。

ではイエスは、弟子たちにどのように祈るよう教えられたのか。「エホバよ」と語りかけるように励まされたのだろうか。全くそんなことはない。あるときイエスは、弟子たちに対し、いわゆる「主の祈り」といわれる祈りを教えられた。その祈りは、マタイ 6章9節以下、ルカ 11章2節以下に記されている。イエスが神に対し何と語りかけるよう教えられたのか、よく見ていただきたい。

お分かりいただけたでしょうか。イエスは弟子たちに、「主の祈り」において、「天におられるわたしたちの父よ」と祈るよう、教えられたのである。「エホバ」とか、四文字語を使って神に語りかけるようには教えなかった。イエスは、ご自分も使われた親しみを込めた神への呼びかけ、つまり「父」という言葉を使うよう言われたのである。神はイエスにとって父であっただけでなく、弟子たちにとっても父であったのだ。

イエスが歴史の舞台に登場するまでは、ユダヤ人は祈りのとき、神を父と親しく呼びかけるようなことはしなかった。旧約聖書には、民族としてのイスラエルの民全体が神を「父」と呼んだ例はある。しかし、ユダヤ人が、一人の個人として、神を父と親しく呼びかけるようなことは許されなかった。

神に向かって何と呼びかけるかという問題は、単なる祈りの言葉遣いの問題ではない。祈る人が神とどのような関係にあるのかを示す、信仰の根幹にふれる問題である。キリストは、キリストを通して神を信じる人々に、神を「父」と呼ぶことのできるすばらしい関係に入れてくださった。だから、キリスト者にとっては、神は、(自分の実際の父以上に) 愛を持って生み、育て、常に傍らにいて必要なときに手を差し伸べ、親しい交わりを楽しみ、喜んでくださる父

のようなお方なのである。そういう神信仰をもっているからこそ、神に対し「父よ」と親しく呼びかけることができるのである。

ものみの塔は、組織独自の翻訳聖書『新世界訳』を出版している。その新約聖書には、「エホバ」という言葉が237回出てくる。ではその『新世界訳』において、イエスは何回ぐらい「エホバ」というみ名を語っているのか。20回である。そのうちの18回は、旧約聖書からの引用部分に出てくる。すると、旧約聖書からの引用ではない箇所において、イエスがエホバに言及されたのは、わずか二箇所のみということになる。しかもこの二箇所は、イエスが祈られたという箇所ではない。ということは、組織が出版している『新世界訳』においてでさえ、イエスは一度も神に向かって「エホバよ」と語りかけて祈ってはいないのである。いつでも「父よ」だった。

弟子たちの祈り

では、イエスの弟子たちが実際に祈ったときはどうだったのか。彼らは、「エホバよ」と神名を使って祈ったのか。それとも「エホバ」という言葉は使わなかったのか。

使徒10章2節、ローマ15章30節、Ⅱコリント13章7節、Ⅰテモテ5章5節などを見ていただきたい。そこでは、祈り手は「神」に語りかけている。さらに、エペソ3章14-15節では「父」に、である。彼らは決して、「エホバよ」という呼びかけをしなかった。

組織が出版した『新世界訳』では、使徒1章24節、8章22節、8章24節において、イエスの弟子たちが「エホバ」に祈ったかのように記されている。しかしこれらは、翻訳者がものみの塔組織の教えに合わせて勝手に訳を変えた結果である。それらの箇所の一つ一つを、ものみの塔組織が出版している『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』という書物で調べていただきたい。そこには、「キュリオス」というギリシャ語が出てくる。この語は、「エホバ」と訳すのではなく、「主」と訳さねばならない。「エホバ」と訳すのは誤訳である。

ユダヤ人たちは、紀元前四世紀ごろになると神のみ名を神聖なものと考えあまり、神の名前を口にしなくなる。そうすることは神を冒瀆することになると考えたのである。このことは、イエス時代の、そしてその後の使徒時代のユダヤ人にとっても同じだった。彼らは、祈りのときの神への呼びかけにはたくさんタイトル（例えば、「主権者なる主よ」とか、「宇宙の王なる方よ」等々）を使ったが、神の名前（四文字語）だけは避けたのである。

イエスであれ、弟子たちであれ、祈るときには「エホバよ」とは呼びかけなかった。そういう神名を使う必要がなかったからである。実は、「エホバ（この発音が正しいかどうかは、今は問わない）」という神名には、独特の意味があったのだ。

旧約聖書では、全能者、創造者を表すときの神には、「エロヒーム（神）」という言葉が使われた。一方、イスラエル民族と契約を結ばれた神を強調するときには、四文字語が使われた。四文字語は、アブラハムやモーセと契約を結ばれた神に対して使われたタイトルであり、その契約の対象者であるイスラエル民族にとっては特別な意味があった。つまり四文字語は、イスラエル民族との固有な関係を表す神の名前だった。

従って、キリストの贖いを受け、キリストとの新しい契約にあずかる人々（キリスト者）にとっては、四文字語を使う必要など全くなかった。それは、旧約聖書における契約の枠組みにおける神名だったのだから。イエスとその弟子たちは、「父」、「神」、「主」というタイトルを

神への語りかけに使ったのである。

ヨハネ 17 章 6 節および 26 節の意味

エホバの証人は、ヨハネの福音書 17 章 6 節と 26 節に基づいて、イエスは神のみ名を明らかにした、明らかにしたという以上、神の名前を使ったはずであると主張する。確かにイエスは、「わたしは、あなたが世から与えてくださった人々にみ名を明らかにしました。」とも、「そしてわたしはみ名を彼らに知らせました。また [これから] 知らせます。」とも言われた。

では、これらの箇所ではイエスが「み名を明らかにしました」と言われたのはどういう意味だったのか。

『新世界訳』では、イエスは「エホバ」という名前に 20 回言及している。その中で、イエスが「エホバ」という名前の意味を明らかにした箇所はあるだろうか？

イエスが使われた 20 回のうち 18 回は旧約聖書からの引用文であり、エホバのみ名に関するコメントはない。他の二箇所はマルコ 5 章 19 節と 13 章 20 節であるが、そこでも、「エホバ」についてはたまたま言及されているだけで、イエスが「み名を明らかにする」ようなことはしていない。

では、「み名を明らかにする」とはどういう意味か。三つの可能性がある。

まず聖書において「み名」とは、その人の本性、人格、あるいはその人自身を指す。従って、イエスはその説教や奇跡的な業をとおして、父である神の本性、お姿、実態を明らかにした、という意味かも知れない。

二番目は、ギリシャ語の「オノマ (名前)」は「デュナミス (力)」と同義語のように使われている用例から、福音書の中に記されているイエスの奇蹟的な業が神の力 (み名) を現わしたと解釈できる。

三番目の解釈は少々長い説明を必要とするが、きわめて興味深いものである。私自身は、この解釈がよいと思っているので、読者の皆さんにはここに展開されている一つ一つの説明を丁寧に追いかけていただき、それぞれがご自分の結論を導き出していきたい。

まず、ヨハネの福音書 17 章の 11 節および 12 節を開いていただきたい。『新世界訳』では、11 節の「わたしに与えてくださったご自身のみ名」に対し、12 節の「わたしに与えてくださったあなたご自身のみ名」には、「あなた」という言葉が加えられている。しかし、ギリシャ語原文は全く同じ言い回しで、直訳すると 11 節及び 12 節とも「あなたがわたしに与えてくださったあなたのみ名」となる。この表現は 6 節および 26 節の「あなたのみ名」に「あなたがわたしに与えてくださった」という但し書きをつけたものである。すると 6 節および 26 節の「あなたのみ名」とは、「あなた (神) がわたし (イエス) に与えてくださった」名前ということになる。

では、イエスに与えられた名とは何だろうか。ヨハネの福音書を注意深く見ると、神がイエスにお与えになった別の名前が出てくる。ヨハネの福音書 8 章 24 節、28 節、13 章 19 節、18 章 6 節をお読みいただきたい。

『新世界訳』では、これらの箇所に「その者」という言葉が出てくる。『新共同訳』では二重括弧付で『わたしはある』と訳出されている。そのギリシャ語「エゴーエイミ」は、普通、後ろに何かの言葉がついている場合「わたしは・・・である」と訳される。ところが上記の箇

所においてはいずれも、説明の言葉は続かない。従って、直訳は、「わたしはある」と訳さねばならない。

この表現は他に、マタイ 14 章 27 節、マルコ 6 章 50 節、14 章 62 節、ルカ 22 章 70 節などに出てくる（ただし、『新世界訳』はマルコ 14 章 62 節のみ「その者」と訳している）。この「エゴージェイミ」という表現こそ、ヨハネの福音書 17 章 6 節及び 26 節の「神がイエスに与えられた名」に他ならない。

イザヤ 43 章 25 節、51 章 12 節の七十人訳では「エゴージェイミであるわたしが」と神（『新世界訳』ではエホバ）は述べている。イザヤ 52 章 6 節では、わたしの名（四文字語を指すことは明らか）と「エゴージェイミ」とが同格に置かれている。さらに、イザヤ 45 章 18 節、ホセア 13 章 4 節、ヨエル 2 章 27 節などでは、「わたしがエゴージェイミである」と神（エホバ）が語りかけている。

この「エゴージェイミ」はヘブライ語の「アニーフー」にあたり、一世紀のユダヤ人の間では、過越の食事のときに「神の自己啓示」の特別なタイトルとして知られていた。『参照資料付き聖書』（1774-1775 頁）は、「エゴージェイミ」（ヨハネの福音書 8 章 58 節）と「アニーフー」とを同一視したり、出エジプト 3 章 14 節と関連させるべきではないと述べている。ということは、ものみの塔のリーダーたちは、イエスに与えられた「エゴージェイミ」という句が四文字語と関わりがあるという事実に（少なくとも反対者が沿う主張していることに）気づいている。実は、ヨハネ 8 章 58 節において、イエスがご自分のことを「エゴージェイミ」とであると宣言したので、次節でユダヤ人たちはイエスを石打の刑にしようとしたのである。

もしイエスに与えられた名が「エゴージェイミ」だとしたら、イエスはどのようにその名を明らかにしたのだろうか。次のイエスの言葉にヒントがある（以下の引用は『新改訳』）。

「わたしを見る者は、わたしを遣わした方を見るのである」（ヨハネ 12:45）。

「わたしを見た者は、父を見たのである」（ヨハネ 14:9）。

これらの聖句は、イエスの生涯そのものがイエスの父なる神を現すものだという宣言である。もともと『新世界訳』は、このヨハネ 12 章 45 節と 14 章 9 節において「も」という文字を入れ、ニュアンスが違うものに訳出している。ものみの塔組織にとってイエスは父と同じ神ではあり得ないので、『新世界訳』は、ギリシャ語原文にはない「も」を挿入したのである。

さらにヨハネは、イエスの生涯について、その初めの部分で次のように要約している。「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を解き明かされたのである」（ヨハネ 1:18）。この聖句の中に、イエスが父である神を明らかにされたことがはっきり述べられている。

結局、ヨハネ 17 章 6 節と 17 章 26 節において、イエスが「み名を明らかにしました」と言われたのは、イエスが「エホバ」という神の名前を明らかにした（ものみの塔はそう主張している）という意味ではなく、神ご自身を明らかにした、という意味だったのである。従って、イエスがみ名を明らかにした以上、イエスは神名を使われたはずだというエホバの証人の議論は意味をなさない。

イエスの会堂での聖書朗読の問題

エホバの証人は、イエスが「エホバ」に言及された例として、ルカ 4 章 16-19 節において、イ

イエスがイザヤ書 60 章の初めの部分を読み上げたことを取りあげる。果たしてそれは、イエスが「エホバ」という神名を使った証拠になるのだろうか。

まず、当該箇所を『新世界訳』で読んでみよう。

「そこで預言者イザヤの巻き物が彼に手渡された。彼は巻き物を開き、こう書いてある所を見いだされた。『エホバの霊がわたしの上にある。貧しい者に良いたよりを宣明されるためにわたしに油をそそぎ、捕らわれ人に釈放を、盲人に視力の快復を宣べ伝え、打ちひしがれた者を解き放して去らせ、エホバの受け入れられる年を宣べ伝えさせるために、わたしを遣わしてくださったからである。』」

これは、ある安息日にナザレ村の会堂で行われた礼拝の記録である。とすれば、当時の習慣から、イエスがイザヤ書の巻物を手渡される前に、まずヘブライ語の「律法の書」が朗読者によって 3 節ずつ朗読され、通訳者によってそれがアラム語に翻訳されたはずである。その後イエスは、ヘブライ語のイザヤ書巻物を受け取り、上記箇所をヘブライ語で読まれ、ご自身でアラム語によって解説されたのであろう。

ここでイエスが開かれた聖書箇所はイザヤ書 61 章 1-2 節である。ものみの塔組織のリーダーは、この聖書箇所のヘブライ語には四文字語が出てくるので、イエスは「エホバ」と読んだはずだと主張する（イエスが実際に読んだときは「アドナイ」という発音だっただろう）。そして、それを根拠に、『新世界訳』の訳者たちは、「エホバの霊」と訳したわけである。

ところで、ものみの塔組織が出版している『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』を見てほしい。『新世界訳』が「エホバの霊」と訳したギリシャ語は「プニューマ・キュリオス（主の霊）」で、エホバに当たる四文字語はどこにも見当たらない。エホバの証人たちは皆、『新世界訳』が原典のギリシャ語聖書を逐語的に忠実に訳しているという組織の教えを信じている。もしそうであるなら、「主の霊」と訳すべきなのに、そう訳しているのは『新世界訳』ではなく、『新改訳』の方である。

ものみの塔は、ルカの福音書 4 章 18-19 節の中に「エホバ」という言葉を挿入するため、イエスが読まれたであろう旧約聖書を持ち出す。そして、そのときにイエスが「エホバ」と読んだであろうことを根拠に、イエスはエホバに言及された、と論じる。これでは、ルカの福音書の『新世界訳』は、ギリシャ語原本からの翻訳とは言い難い。まして、『新世界訳』を字義訳であるなどとは（エホバの証人たちは、字義訳だから正しく一番優れた翻訳だと思い込んでいる）、口が裂けても言えない。

あるいは、エホバの証人はこんな別の議論を展開するだろう。ルカはギリシャ語で福音書を書いたとき、イエスが読まれたイザヤ書のテキストを七十人訳から引用した。その七十人訳には四文字語があったはずだから、ルカが書いた原文には四文字語があったはずである。それが今日のギリシャ語のテキスト『ギリシャ語聖書王国行間逐語訳』にないのは、三～四世紀の頃、書士によって「キュリオス（主）」に置き換えられてしまったからである。

確かに、「主」とは訳されず、四文字語がそのまま残っている七十人訳の写本が見つまっている（この問題は別の機会に取り上げる）。だから、ルカが引用した七十人訳にも四文字語が残っていた可能性はある。そこで、ここでは百歩譲って、エホバの証人の主張が正しいという仮定に立って論議を進めよう。

それでは、イエスがヘブライ語でイザヤ書 61 章 1-2 節を読まれたとき、何回エホバと発音

されただろうか。『新世界訳』のルカ 4 章 18-19 節によれば 2 度である（これは七十人訳ギリシャ聖書に基づく）。では、イザヤ書 61 章 1-2 節そのものではどうか。『新世界訳』には「エホバ」という言葉は 3 度出てくる（これはヘブライ語の旧約聖書と同じ）。すると、イザヤ書 61 章 1-2 節の七十人訳は、ヘブライ語旧約聖書の忠実な訳とは言えない。実際ルカは、基本的にはイザヤ書 61 章の七十人訳から引用したようであるが、その引用の際に一部をカットしたり、ヘブライ語原典を自分で直接訳し直している。さらに、イザヤ書 58 章 6 節の一部をも加えている。

つまり、ルカは七十人訳を忠実に引用したわけではなかった。だから、仮にルカが参照した七十人訳に四文字語が残されていたとしても（この可能性はきわめて低い）、ルカがイザヤ書のテキストを引用するに当たり、七十人訳どおりに四文字語をそのまま残したとは限らない。現存するルカの福音書の写本の中に、一つでも四文字語が残っているものがあれば、ものみの塔が主張する論理も成り立つかもしれない。しかし、そのような写本がない以上、七十人訳を根拠にイエスが「エホバ」という神名を口にしたと論じるのは愚かである。

ルカが四文字語を使ったかどうかという問題は、今日まで残されているルカ福音書の写本のどこかに四文字語が残存しているかどうかということにかかっている。現存するすべてのギリシャ語写本と古代語訳の写本にただの一度も四文字語が出てこないという事実こそ、この論議の決め手なのである。

第四章 「エホバ」と一世紀のユダヤ人たち

イエスとその弟子たちが「エホバ」という神名を使わなかったということはお分かりいただけたでしょうか。では、イエス時代の一般のユダヤ人たちは、「エホバ」という言葉を使うことに対しどのように考えていたのでしょうか。本章では、この問題を扱う。

ヨセフスの証言

まず、イエスと同時代のユダヤ人の歴史家ヨセフスが述べていることを紹介しよう。

「そこで神は呼び名を [はじめて] モーセに明らかにされたが、それはかつて人々が一度も耳にしたことのないものであり、それについては、わたしもまた口にすることを許されていない。」

ここでヨセフスは、(祭司であった) 自分もまた神の名を口にすることは許されていない、と述べている。つまり、イエス時代のユダヤ人たちは、(たとえ祭司であったとしても) 四文字語を発音することは許されなかったのである。後に見るように、このヨセフスの証言は、当時のユダヤ教の文献が述べていることに完全に一致している。

ところが、このヨセフスの言明に対し『洞察』(一卷 392-93 頁) は次のような説明をしている。「しかし、ヨセフスの述べた言葉は、モーセ以前の時代にも、神の名が知られていたことに関して不正確である上に、神の名を発音したり使ったりすることに関して一世紀当時の一般的な態度が一体どのようなものであったかについてはあいまいで、はっきりしたことは示していません。」

『洞察』は、モーセ以前にも神名「エホバ」は知られていたもので、ヨセフスがモーセ以前のユダヤ人は神の名を一度も耳にしたことがなかったと述べているのは不正確である。そんな不正確なことを言うヨセフスが「それについては、わたしもまた口にすることを許されていない」と述べたところで、その言明は当てにならず、一世紀のユダヤ人が四文字語を発音したり、使ったかどうかという点については何もいえないと主張する。このようなものみの塔組織の弁解は、ヨセフスの記述を正確に解釈したものではない。

ヨセフスが、モーセ以前のユダヤ人が神の名を耳にしたことがなかったと述べているのは、出エジプト 6 章 3 節において始めて、神がモーセに神名の深い意味を啓示されたあの歴史的事実に言及している。モーセ以前の人々が四文字語そのものを知らなかったなどと言っているわけではない。実際ヨセフスは、アブラハムや族長たちが神名を使っていたことをよく知っていた。モーセに啓示されたのは、アブラハムに与えられ、イサクやヤコブに継承された神の約束(土地と子孫を与えると言う)がモーセの時に至って実現する、ということだったのである。

四文字語は、ヘブライ語の「ハーヤー(ある、なる、などの意味)のヒーフィル形(使役形で、あらしめる、ならしめるの意)で、アブラハムに与えられた契約を実現される方、を意味する。アブラハムに与えられた約束は長い間忘れ去られていたかに見えるが、出エジプトのときにいよいよ実現することになったのである。モーセはこのすばらしい啓示を受けた。そのことを示すのが四文字語「ヤハウエ」の意味だった。従って、モーセに関するヨセフスの記述は

正しいのであり、一世紀には祭司である自分を含め、普通の人が四文字語を口にするのを許されていないという言明もまた正確だったと言わねばならない。

なお、ヨセフスが記している「口にすることを禁じられている」（ウーセミトンポイエイン）という表現は、四文字語の発音自体は分っていたことを示唆している。ヨセフスが祭司家の出身であったことを考慮するなら、この言い回しはきわめて正確だったことが分かる。

ヨセフスは、『古代史』という書物を著しているが、旧約聖書の出エジプト記 6 章 2 節以降に記されている四文字語の啓示的な出来事については一言も言及していない。ではなぜ、これほど重要な事件に触れなかったのか。おそらくヨセフスは、神名に言及することを避けたかったからだろう（多くの学者はそう考えている）。実際ヨセフスは、四文字語のギリシャ語訳に当たる「キュリオス」という言葉さえ、使うのをためらったのである。

ミシュナーの証言

紀元前三世紀ぐらいから紀元後二世紀ぐらいまでにまとめられたユダヤ教の文書に『タルムード』という書物がある。この書物は、イエス時代前後のユダヤ人たちが四文字語をどのように考えていたかを明らかにしている。その幾つかを紹介しよう。

例えば、ダンビー訳のミシュナは、年に一度の贖罪の日に関して次のように述べている。「また、神殿の中庭に立つ祭司たちや民は、大祭司の口から発せられて言い表されたみ名を聞くとひざまづいて身をかがめひれ伏して、『その王国の栄光のみ名が、限りなく永久にほめたたえられますように！』と言うのであった」（ヨマー 6 章 2 節）。つまり、神のみ名四文字語は神殿で大祭司によって語られ、民はその神名を聞くとひれ伏し、神を賛美する言葉を告白した、というのである。

また、祭司が日ごとに述べる祝福の言葉については、次のように言われている。「彼らは神殿ではみ名を書かれているとおりに発音したが、地方では代わりの言葉で発音した」（ソター 7 章 6 節）。ここでは、祭司は、神殿の中では、神名はその発音どおりに発音されたが、神殿以外では、代用語が用いられた、というのである（この言葉に対するものみの塔による全くお門違いの弁明については、この直ぐ後で取り上げる）。

さらに、神のみ名を発音することが冒瀆の罪に当たることが次のように述べられている。「冒瀆した者も『み名を発音したのでない限り』有罪とはならず、また冒瀆の罪が関係する裁判では、証拠がすべて審理されるまで代わりの名が使われ、その後、おもな証人が多分、神の名を用いて、『自分の聞いた事柄をはっきりと言う』よう個人的に求められた」（サンヘドリン 7 章 5 節）。ここでは、神名を発音するという冒瀆の罪を審理するにあたり、代用語を用いながら審理された経過が述べられている。ユダヤ人たちは最後の最後まで、神名を発音することには慎重だったことが分かる。

「来たるべき世に何の分も持っていない」者たちを列举して、「アバサウルはこう言う。また、み名をその正しい文字で発音する者も」（サンヘドリン 10 章 1 節）。ここでは、神名の四文字語を発音する者は、来るべき世に生きる権利を持っていない、と断言されている。

以上のようなタルムードの証言から、イエス時代の一般のユダヤ人が四文字語を発音することを許されていなかったことは明らかである。

ものみの塔の反論

ものみの塔組織のリーダーは、このような文献があったことをよく知っている。しかし彼らは、別のことを証言している文献を捜して次のように弁明する。『洞察』の文章を引用しよう。

「しかし、このような消極的な見方があるにもかかわらず、ミシュナの最初の部分には、『人は〔神の〕み名〔を使って〕仲間と挨拶すべきである』という積極的な命令もあり、その後にはボアズの例（ルツ2:4）が引き合いに出されている」（ベラホット9章5節）。

確かにベラホット9章5節の「神のみ名を使って仲間と挨拶すべきである」という言葉は、解釈が難しいところである。タルムードの注解者たちもこの法令がもたらされた背景は理解できないと述べている。マルモシュタインという学者は、この文章は、「神にはみ名がないというヘレニズムの教えに対抗するために企画された」と推測している。あるいは、そうかも知れない。

いずれにしても、ユダヤ人たちが神のみ名、あるいは四文字語を使ってお互いにあいさつを交わしたことを伝える歴史的資料は現存しない。むしろ、我々が手にし得る限りの歴史的証拠は、反対の状況（神名を用いて挨拶をすることはなかった）を明らかにしている。従って、このベラホット9章5節の文章から、当時のユダヤ人が四文字語を使って挨拶言葉を交わしていたと結論づけることには慎重でなければならない。

ものみの塔は、組織にとって都合のよい資料を探しだし、例え例外的な事項であっても、根拠薄弱な用例であっても、自説の弁明に有効に見えるものは、歴史的な検証をバイパスして都合よく利用する。こういう姿勢は、真理を追究する客観的な学問の世界では、排除されねばならない。すべての物事は、あらゆる歴史的資料を収集し、比較・検証しながら、客観的・総合的な判断を下さねばならない。例外は例外、可能性は可能性として扱い、予断を持って資料の取捨選択をしながら自説を弁明するようなことをしてはならない。

最後に、上記の「ソター7章6節」の言葉、「彼らは神殿ではみ名を書かれているとおりに発音したが、地方では代わりの言葉で発音した」についての『洞察』の弁明にふれておこう。

『洞察』は、この情報が西暦70年頃には神の名が使われなくなっていたことを示すかもしれないと述べた後、次のように解説する。「しかし、当時でさえ、神の名の代わりに代用名を使っていたとはっきり言われているのは、おもに祭司たちであって、それもただ地方のことでした」。つまり、祭司は地方において代用語を使っていたが、一般の人々は地方以外で神名を使ってもよい、ものみの塔のリーダーはそう読んだのである。

これは完全な誤読である。

この言葉は、祭司が神殿において祝福を与えるときのことについて語っている。祭司は、神殿では神名を書かれたとおりに発音したが、「地方」では、代用語を発音した、そう言っているだけである。この箇所を、祭司はいけないけれど、一般の人々はよいとか、地方ではよいけど、都会ではだめ、と読むのは全くの見当違いである。祭司が許されていないのであれば、まして一般の人々はノーである。

また、「地方」という言葉をエルサレムなどの都市に比べた「地方」と解釈するのも間違いである。「地方」という言葉の前後に、神殿の中における祝福の言葉は一つだが、神殿以外での祝福の言葉は三つであるとか、神殿の中では頭より上に手を上げて祝福しなければならない

が、神殿以外の場所では肩の高さまででよい、などという規定がこまごまと述べられている。従って、この箇所文脈では、「地方」という言葉（英語では IN THE PROVINCE）は「神殿以外の場所」を指している。つまり、祭司は、神殿では神名を使ってよいが、神殿以外では代用語を使ったのである。一般の人は、神殿ではむろんのこと、神殿以外のところでも、神名を発音することは許されていなかったのは当然である。

このことは、このすぐ後に四文字語は「きわだった名前」（シム・ハメフォラッシュ）なので、通常は代用語が用いられ、神殿以外では使用されなかったと言われていることから明白である。さらにイスラエルの民は、普通の祝祷に対しては「アーメン」をもって応えればよかったが、神殿で四文字語による祝福を受けた場合には、「アーメン」という言葉だけでは不十分で、「すべての祝福と賛美の上に高められた栄光のあなたのみ名に祝福があるように」と、特別な言葉を唱えることが求められている。こういう記述は、イエス時代のユダヤ人が四文字語を神聖視し、決して発音しなかったことを確証している。

ミシュナーの歴史的な価値

以上のようなミシュナーの証言に対し、『洞察』は「ミシュナーの伝承の歴史的価値には問題があります」と述べ、その証言をそのまま受け取ろうとはしない。確かに、四文字語についてはさまざまな証言があり、簡単に結論付けられない要素もある。み名を使って挨拶を交わすようにという文章がある以上（ベラホット 9 章 5 節）、現存する資料にそういう実例を一つも見いだせなくても、その可能性を留保し、慎重に取り扱わねばならないことは言うまでもない。一つ一つのテキストをその文脈に沿って厳密に解釈し、その上で全体がよく調和されるように解釈することは歴史の文献を扱うときのイロハである。

といっても、ものみの塔組織が「ソター 7 章 6 節」の言葉を、祭司ではない普通の人々は「エホバ」という神名を使っていた、と解釈するようなことは論外である。この文章であれ、他のユダヤ教の文献であれ、どこをどう読んでも、ものみの塔のような解釈が出てくる余地はない。

イエス時代のユダヤ人が神名をどのように考えていたかは、次のような資料をも合わせて考えておく必要がある。

「ネダリーム 8b」は、神の名は神の本性および民との関係を表わすものであり、神が共におられることを意味すると説いている。従って、「シャバス 61b」によれば、容器やベッドなどに神のみ名を発見するなら、それらは処分されねばならなかった。

また、「シェブオット 35b」は文書中に神の名が出てくるなら、それを削除することを禁じている。それだけではなく、その四文字語の前に付いている前辞詞や、後に付いている人称詞は削ってもよいなどと、いちいち指示している。さらに「ネダリーム 10a」は、主へのささげ物に対してのみ、神の名を使うことが許されるが、その場合にも、コルバンラアドナイ（献げ物に対し主）とささげ物を四文字語の前に言わなければならないと述べている。

「ネダリーム 7b」によれば、ユダヤ人社会ではもし隣人が意味なく神の名を使ったなら、その人を追放しなければならない。もしそうしなければ、自分の方が追放されてしまう。というのは、神の名をみだりに唱えることは貧困をもたらす、貧困は死をもたらすと信じられていたから。

以上のような言葉は、結局、イエス時代のユダヤ人は四文字語を発音しなかったことを明ら

かにしている。

四文字語はどのように発音されたのか。

ものみの塔組織のリーダーは、四文字語は「エホバ」と発音されていた、と教える。しかし、歴史的にはそれは正しくない。一世紀のユダヤ社会では、「アドナイ（主）」と発音されていたからである。なぜそのように言えるのか。

タルムードの『キッドウシン 71a』は、四文字語は「アドナイ」と読まれていたことを証言している。また『ペサヒーム 50a』は、この世において四文字語は書かれたとしても、読まれるのは「アドナイ」であるが、来るべき世では書かれるものも読まれるものも、「ヨッド・ヘー（つまりヤーウェ）」であると述べている。これらはいずれも、四文字語が「アドナイ」と読まれていたことを証言している。

紀元前一世紀頃の死海写本の中に「第一イザヤ書」という文書がある。そこでは、現在の旧約聖書の四文字語が「アドナイ」という文字になっていたり（例えば 3:17）、反対に現在の旧約聖書の「アドナイ」という箇所が四文字語になっている箇所がある（6:11、7:14、21:16、28:2 等）。この現象は二つのことを示唆する。一つは、死海写本のイザヤ書は、筆記者が傍らで朗読されたものを筆写したものであろうこと、もう一つは、当時既に四文字語は「アドナイ」と読まれていたことを。

もしそうであれば、イエスが会堂でイザヤ書 61 章 1-2 節をヘブライ語で読んだとき、「アドナイ」と読んだはずである。決して四文字語を「ヤハウエ」とか「ヤーウェ」（エホバの証人流に言えば「エホバ」）などとは発音しなかった。もしそのように発音したとすれば、当時のユダヤ人たちに殺されてしまったはずである（レビ 24:16）。

ヨハネ 8 章 58 節でイエスは、ご自分に「エゴーエイミ」という言葉を当てはめた。そのときイエスは、石打ちの刑にさらされそうになった（8:59）。当時のユダヤ人は、「エゴーエイミ」というギリシャ語は、ヘブライ語においては四文字語に当たることをよく知っていたので、イエスは冒瀆の罪を犯したと考えたのである。

マルコ 14 章 64 節においてイエスは、当時のユダヤ人から「神をけがす言葉」を語ったと非難されている。そのギリシャ語「ブレスフェミアス」は、一世紀のユダヤ社会では四文字語を発音した場合に適用された言葉だった。ところがイエスの場合は、「神殿を破壊したなら、三日の内に建て直す」ということを言われた場合か（マルコ 14:58）、キリストの来臨予告について言及された場合にのみ（マルコ 14:62）、この言葉が使われている。もしイエスが四文字語を発音したとすれば、ユダヤ人はその点を取り上げ、イエスが「神をけがす言葉」を語ったと非難できたはずである。沈黙からの議論には慎重でなければならないが、この「神をけがす言葉」がイエスに適用された内容を考えると、イエスが四文字語を発音されなかったという事実の、間接的な証拠と見なすことができよう。

第五章 「エホバ」と新約聖書

ものみの塔は、新約聖書のギリシャ語原典には四文字語があった、と主張する。現存する写本には、四文字語を残している写本は唯の一つもない。そこで組織は、いろいろな屁理屈をつけ、原典には四文字語があったことを証明しようとする。しかしそれは、全く無謀な議論である。本章では、このような問題を扱う。

マタイの福音書には四文字語があったか？

ものみの塔は、新約聖書に四文字語があったことを証明するため、マタイがヘブライ語で福音書を書いたという説明からスタートする。新約聖書の最初の書物であるマタイの福音書で証明できれば、後は何となく、他の書物も同じだったんだろうという話になるわけである。まず、『参照資料付き聖書』（1756頁）の次の言明を読んでいただきたい。

「マタイは靈感によるヘブライ語聖書から 100 回以上も引用している。マタイとしては、神の名の含まれている箇所を引用する際、忠実さを示して、ヘブライ語によるその福音書の記述に四文字語をそのまま含めざるを得なかっただろう。マタイの福音書がギリシャ語に翻訳されたとき、当時の慣行に従い、四文字語は訳されずにそのままギリシャ語本文にとどめられました。」

この文章の趣旨は、「マタイは最初ヘブライ語によって福音書を著したが、その際四文字語を含めざるを得なかった。マタイはその後、そのヘブライ語福音書をギリシャ語に翻訳したとき、四文字語はそのまま残したはずである」ということである。では果たして、マタイは、ヘブライ語の福音書を最初に著し、その後その福音書をギリシャ語に訳し直したのだろうか。

『聖書から論じる』（90頁）は、四世紀の教父ヒエロニムスがその事実を伝えている、と述べている。確かに、マタイの福音書の執筆背景について、二世紀のエイレナイオスや四世紀のヒエロニムスが言及している。彼らの記述は、パピアスが「マタイはヘブライ語で『神の語録』を集成した。そしてめいめいが、自分にできるだけをして、それらを解釈した」（「エウセビウスの教会史」、3, 39, 16）と述べていることに基づいている。従って、マタイが最初にヘブライ語の福音書を著したかどうかを知るには、パピアスの言葉をよく吟味しなければならない。

パピアスの証言

パピアスが、マタイはヘブライ語で「神の語録」を書いたというとき、その「神の語録（ギリシャ語の「タ・ロギア」）」という言葉は、いったい何を意味しているのか。ものみの塔が主張するように、我々が手にしているギリシャ語原典のマタイの福音書が訳される基となった「ヘブライ語によるマタイの福音書」を指すのか。残念ながら、そのように解釈する学者はいない。一世紀のユダヤ人たちは、既にヘブライ語を使わなくなって久しかったので、マタイがヘブライ語で福音書を書く必要などなかったからである。

それに、言葉遣いや文体などの観点、さらには他の福音書との関係から、ギリシャ語原典のマタイの福音書がヘブライ語から翻訳されたものとは到底考えられない。例えば、マタイの福

音書とマルコの福音書、さらにルカの福音書の間には（それぞれのギリシャ語の原文を読むと明白なのだが）、明らかに相互に関連する文章（時には全く同じ表現）がたくさん出てくる（例えば、マタイ 24:15-18 とマルコ 13:14-16、ルカ 21:20-22 を比較してみよ）。このような場合、どちらかの著者が他を参考にしたか、あるいは両者が共通の資料をもとに著した、と考えるのが自然である。このこと一つをとってみても、現在のギリシャ語のマタイの福音書がはじめにヘブライ語によって書かれたマタイの福音書から翻訳されたと考えすることはできない。

では、パピアスが述べている「神の語録」とは何を指すのか。現在の新約聖書研究者たちは、三通りの可能な解釈を提唱している。

まず、マタイが福音書を著すにあたり利用したと推測される「イエスが語られた言葉を集めたもの」という理解である。二番目は「イエスがメシアであることを証明するような言葉を旧約聖書から集めたもの」という解釈である。そして三番目は、現在のマタイの福音書とは全く別のものとして書かれた（と推測される）「アラム語による福音書」である。この場合、例えマタイが最初にアラム語で福音書を書いたとしても、今日私たちが手にしているギリシャ語のマタイの福音書とは長さも内容も違ったもの、と考えられている。むしろ、同一人物が書く以上、何らかの関係はあったであろうが、ギリシャ語に翻訳されるための定本のようなものではなかった。

ものみの塔は、現存のギリシャ語のマタイの福音書に四文字語が存在したはずだと主張したため、マタイの福音書がヘブライ語の福音書の翻訳だと強弁し、その根拠にパピアスの言葉を持ち出すのだが、それは土台無理な議論である。

マタイ以外の福音書の場合は？

しかしここでは百歩譲って、現存のマタイの福音書がヘブライ語の福音書から翻訳されたものと仮定して話を進めてみよう。たとえそうだとしても、では、マルコの福音書の場合はどうなるのか。ルカの福音書の場合は？ そして、ヨハネは？

これらの福音書がヘブライ語からの翻訳であると主張する学者はいない。ものみの塔自身でさえ、そんな主張をしていない。もしそうだとすれば、ものみの塔組織が、マタイの福音書がヘブライ語からの翻訳であると強調すればするほど、他の三つの福音書の原本に四文字語が存在したという根拠は薄弱になってしまう。

しかしものみの塔組織は、マルコをはじめ他の使徒たちが新約聖書を執筆したときには七十人訳旧約聖書（ギリシャ語に翻訳された旧約聖書）を用いた。その七十人訳には四文字語が残されていたのだから、それらを引用した際には、四文字語もまたそのまま変えずに残したはずである、と主張するだろう。

確かに、ある七十人訳の写本には四文字語を暗示するヘブライ語の古語の表記が残されている。しかしそれは、七十人訳の写本の中でもほんの一部の話である。大部分の七十人訳の写本においては、「主（キュリオス）」と訳しているのである。しかも前者の場合でさえ四文字語がそのまま残されているわけではなく、四文字語を表わす独特な古語の表記があるだけだということも重要である。

それに、『新世界訳』において神名「エホバ」が出てくるのは、旧約聖書からの引用部分ばかりではない。引用であれば、七十人訳を持ち出すことに意味もあろうが、引用部分でない箇所

については、そうではない。何らかの証拠を示さねばならないはずなのに、私を知る限り、そのような証拠に言及しているものみの塔の出版物はない。あればどなたか教えていただきたい。

書士によって置き換え作業がなされたか？

新約聖書のギリシャ語原典に四文字語があったかどうかということは、現存する新約聖書の写本に四文字語が出てくるかどうかということにかかっている。ギリシャ語原典の写本は、断片的なものも含めれば5,000ほどある。また、最初の数世紀の間に他の言語に翻訳されたものの写本は6,000ほどと言われている。合計で少なくとも11,000ぐらいの写本が存在する。これらの写本の中には四文字語は出てこない。ただの一つの写本にも、である。ものみの塔組織は、これらの11,000に及ぶ写本に四文字語がただの一度も出てこない事実を説明する責任がある。

『洞察』は、使徒たちの時代がしばらく過ぎると、大規模な背教が起こり、聖書から四文字語がすべて抹殺されるという状況が起こった、と主張する。その結果、聖書の写本家たちは、四文字語を「キュリオス（主）」あるいは「セオス（神）」という言葉に置き換えてしまった、と考える。現存する写本11,000はすべて、この背教後に模写されたと考えねばならないことになる。

ものみの塔組織は、その背教は使徒時代から相当の年月が経ってから起こった、と教える。「相当の年月」という言い回しは、二～三世紀、あるいは三～四世紀を想定しているようだ。しかし、新約聖書の写本は二世紀前半のものさえある。とすると、その頃には、既に背教が完了していなければならない。一世紀終わりのクリスチャンたちは皆、「エホバ」という神名を使っていたが、二世紀のはじめの頃になると、何らかの理由で世界中に散らばっているクリスチャンが一人残らず神名を使わなくなった。誰が考えても、そのようなことはありえない。

神は、神の言葉を間違いなく伝えるため、11,000以上の写本を残してくださった。その写本家たちに対し神は、摂理によって一言一句に至るまでも正確に書き写すよう助けられたのだが、もっとも重要な神名四文字語に関してだけは、ただの一人の写本家をも助けることができず、一冊の写本も残すことができなかつた、そういうことになる。いったいあなたは、そんな神を信じることができるだろうか？ もしエホバの証人が信じるエホバ神がそのようなお方であるのなら、エホバという神は「歴史を支配する神」などではあり得ない。

P46の写本が提起する問題

ものみの塔のリーダーは、新約聖書の原典にあった四文字語が「主」に置き換えられたのは三ないし四世紀ごろだったと教えている。『洞察』は、「それはイエスやその使徒たちが亡くなってから何世紀か後に起きたようである。」とか、「それで、セプトゥアギンタ訳の中の『四文字語をキュリオスで置き換えた』、いわゆるキリスト教徒とは、イエスの初期の弟子たちのことではない。それは予告された背教が相当発展し、キリスト教の教えの純粋さが損なわれた何世紀かの後の時代の人々のことなのである」と述べている。

しかし、最近の写本研究の成果は、このようなものみの塔の主張に説得力がないことを明らかにしている。写本の一つに、チェスタービーティパピルスの第二（P46という符号で表わされる）という、エジプトで発見された断片的な写本がある。それらは一枚ずつ折り重ねたパピ

ルスの写本で、元来 104 枚あったが、現存するのは 86 枚のみである。そのいずれにおいても多少の破損は見られるが、きわめてよい状態で保存されている。

この写本の年代については、これまでほとんどの学者が 200 年頃のものとして推定してきた。ところが最近、写本研究の第一人者キム博士が、それらの写本は一世紀後半、それもドミチアヌス皇帝の時代（81 年頃）のものではないかという仮説を発表した。P46 の書体は二、三世紀のものではなく、一世紀後半のものに類似しているというのである。この学説は未だ定説にまでは至っていないが、大変興味深い研究として、多くの学者が注目している。

この P46 の写本には、ローマ人への手紙の一部、コリント人への手紙第一、コリント人への手紙第二、エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、ガラテヤ人への手紙、テサロニケ人への手紙第一の一部など 8 つのパウロの手紙とヘブライ人への手紙が含まれている。しかも、パウロが旧約聖書から引用している箇所を相当数含んでいる。もしパウロが手紙を記したとき四文字語を書いたとしたなら、この写本の当該箇所に出てくるはずだと考えるのは当然である。

むろんそのような箇所においても、四文字語はただの一度も出てこない。『新世界訳』において、「エホバ」と訳出している箇所においても、である。読者の皆さん、ここでよく考えていただきたい。この写本に含まれているパウロの手紙のあるものは 60 年前後に書かれている。もしパウロが四文字語を書いたのであれば、ものみの塔が主張する四文字語から「主」への書き換え作業は、60 年から 80 年のわずかな 20 年間になされたと考えなければならなくなる。

それでもエホバの証人は、その写本はパウロが書いた原本ではなく、あくまでも写本である。だから原典においてパウロが四文字語を書かなかったという証拠にはならないということだろう。むろん、パウロ直筆の原本が見つからない限り、決定的なことは言えない。しかし、60-80 年と言えば、未だヨハネをはじめとする使徒たちが活躍している期間である。先の「四世紀頃の背教によって四文字語が削除されるようになった」という洞察の説明とは大きく異なる。

むろん、たとえ P46 が 200 年前後の写本であったとしても（この説を大多数の学者が信じているのだが）、ここで展開された議論は基本的に当てはまり、ものみの塔が考える三世紀から四世紀の背教という説明は説得力を失う。

ハワード教授のレスポンス

ものみの塔はしばしば、新約聖書研究家ハワード教授の考えを引用する。ハワード教授は、一部の七十人訳ギリシャ語訳聖書に四文字語（またはそれに類する言葉）が残されているところから、新約聖書においても四文字語が使われた可能性を示唆した学者である。実は、スウェーデンのルドペルソンという人がキム博士の論文を読み、ハワード教授に感想を求めた。ハワード教授はキム博士の論文を読み、ペルソン氏に次のような返事を送った。

もしキム博士の年代研究が正しいとすれば、一世紀のパウロの手紙の写本には、私が示唆したように四文字語は使われなかったことになる。このことは私の理論を、少なくともパウロの手紙に限っていえば、きわめて薄弱なものにする。福音書および他の書簡がこの P46 のパターンに従っていたのかどうかは、未だ推測の域を出ないけれども。

ハワード教授は、新約聖書に四文字語があったと仮定する方が説明しやすくなる箇所として、ローマ 10:16-17、14:10-11、I コリント 2:16、10:9、I ペテロ 3:14-15 の 5 箇所を挙げてい

る。ペルソン氏への返事によると、ハワード教授の仮説はパウロの手紙に関する限りは間違いであることを認めたのだから、結局、1977年のはワード教授の論文は、I ペテロ 3:14-15(この部分はP46には含まれていない)を除いて間違いだったことになる。

ところが『参照資料付きの聖書』は、ハワード教授の論文について、次のように述べている。「わたしたちは、次の一つの点を除き、上記の考えに全く同意します。ただ一つ異なっているのは、わたしたちはこの見解を「理論」とはみなさず、聖書写本の伝わってきた過程における歴史の事実として受け入れていることである。」

現代の信頼できる研究者の中で、四文字語が新約聖書の中で書き留められていたと解釈する人は皆無である。ハワード教授もまた、仮説として提案しているに過ぎないし、P46の写本からは、否定的にならざるを得ないことを認めている。にもかかわらず、ものみの塔は、そのようなハワード教授の仮説を、単なる理論ではなく、「歴史の事実」として受けいれると公言してはばからない。

ハワード教授はその同じ手紙に追伸を加え、「ものみの塔は私の論文から余りに多くの引用をしすぎる。私は彼らの理論を支持しているわけではない」と述べている。ものみの塔は、ハワード教授の仮説が自分たちの考えをサポートしているかのように悪引用し、自分たちに都合がよいように利用しているわけである。

第六章 「エホバ」と旧約聖書

これまで、新約聖書において「エホバ」という神名が出てくる根拠について論じてきた。続いて本章では、旧約聖書における問題を論じよう。

むろん旧約聖書は、神がイスラエルの民と契約を結ばれたことを背景にして書かれているので、四文字語「ヤハウエ」が出てくるのは当然のことである。ここではこれまでとは違い、この神名四文字語が登場しない旧約聖書の書物を問題として取り上げる。

神の名が出てこない旧約聖書

エホバの証人は、神の名を使わない人は神を敬っていない、と教えられている。では、旧約聖書の中に「エホバ」という神名が全く出てこない書物、あるいはほとんど出てこない書物がある。そういう書物に対してはどう考えたらよいのか？

例えば、伝道者の書である。その書物には四文字語は出てこない。ものみの塔のリーダーは、この事実を知っているので、『聖書全体は神の靈感を受けたもので、有益である』（112 頁）に、次のような文章を載せている。

「伝道者の書が『神の靈感を受けた』ものであることをどのように確信できるか。ある人は神の名エホバが一度も出て来ないことを理由にこの点に疑問を表明するかもしれません。しかし、伝道者の書は神の真の崇拝を確かに唱道しており、『ハーエロヒーム』すなわち『まことの神』という表現を繰り返して用いている。」

伝道者の書は、「エホバ」は出てこないが、真の礼拝を説き、「まことの神（ハ・エロヒーム）」という表現を繰り返しているので、靈感を受けた書物だと言うのである。この論理はとてもおかしい。四文字語は出てこなくても、真の礼拝を説き、「まことの神」という表現を繰り返しているのだから（この書物に 41 回出てくる）、伝道者の書の著者は靈感を受けているのであれば、「エホバ」を使わねばならないという主張は取り下げねばならなくなる。

次にヨブ記の場合を考えてみよう。ヨブ記は詩文体の文章と散文体の文章に分れる。ヨブと友人たちの会話が描かれている詩文体の方には、四文字語はほとんど出てこない。『聖書全体は神の靈感を受けたもので、有益である』（95 頁）は、ヨブはモーセ以前の 1657 年頃から生きた人物であり、ヨブとの会話の文章に四文字語が出てこないのはおかしいことではない、と説明している。「エホバ」という神名が啓示されたのはモーセの時だったと考えれば、この弁明は当を得ている。ただ、もし一度も出てこないとすれば、ものみの塔の弁明は成り立つのだが、どういうわけか 12 章 9 節のヨブの言明に一度だけ出てくる。ということは、ヨブは四文字語を知っていたということになり、協会の弁明はおかしくなる。

ヨブは、エゼキエルによって、ノアおよびダニエルと並ぶ義人として紹介されている（エゼキエル 14:14、20）。ヤコブもまた、ヨブの忍耐について賞賛している。このヨブは、「神」という言葉を 250 回以上、「全能者」という表現を 30 回ぐらい使っている。ところが、四文字語についてはただの一度しか言及しなかった。この事実は、ヨブは四文字語をあまり重要視して

はいなかったことになる。

次に、エステル記にも四文字語は出てこない。この点について、『聖書全体は神の靈感を受けたもので、有益である』(91頁)は、次のように述べている。

「エステル記は靈感を受けて記されたのでもなければ、有益でもなく、単なる美しい伝説にすぎないと言いたい人もいる。それらの人は、神のみ名が出てこないことを理由にして、そのように主張します。たしかに神のことは直接述べられてはいませんが、ヘブライ語本文には、四文字語の折り句、つまり、一連の四つの語の頭文字がYHWH、すなわちエホバとつづられる箇所が四つあるようである。これらの頭文字は少なくとも三つの古代ヘブライ語写本の中で特に目立つようにされており、またマソラの中では赤い文字で印づけられている。また、エステル7章5節には、「わたしは・・・となる」という神の宣言の折り句があるようである。」

四文字語を神聖視したユダヤ人たちが、四文字語の折り句という問題に関心をもったということはある。しかし、そのようなことは意味のない、迷信的なことにすぎない。ものみの塔がそんなことに神秘的な驚きを感じ、聖書の権威づけに用いるのは、まことに愚かなことである。

一般に折り句の例としては、「それは・・・、妻たちも皆・・・、・・・表するだろう」(1:20)、「王・・・今日、ハマンとご一緒においでになりますように」(5:4)、「しかし、このすべてのことも一そのどれも・・・、わたしには気に入らない」(5:13)などが挙げられる。7章5節の「それは一体・・・一体どこにいるのか」(5:13)は四文字語の折り句ではなく、出エジプト3章14節の「わたしはなる」の折り句である。そして最後は「自分に対し悪いことが定められた」(7:7)である。

このような折り句には何かの意味があるのか。何らかの意味があるようには、私には思えない。これらの箇所は、たまたま折り句のような現象を呈しているに過ぎない。もともとヘブライ語の「ヨード」、「ヘー」、「ヴァブ」の子音は、語の頭や終わりにきやすい文字で、それが四文字語の順番に出てきたからと言って、そこに特殊な意味を見出そうとすることはナンセンスである。あるユダヤ人たちが、このような方法で四文字語を発見することに興味をもっていたことは事実である。しかし、それに何らかの意味を見出し、その書物が神の靈感を受けた根拠に持ち出すのは、ユダヤ人の迷信の世界に迷い込み、間違いの上塗りをするだけである。

詩篇 14 篇と詩篇 53 篇の比較

次に、詩篇 53 篇と詩篇 14 篇とを比べるため、『新改訳』の当該箇所を読んでいただきたい。まず、詩篇 14 篇である。

(1 節) 愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。

彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。

(2 節) 主は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。

(3 節) 彼らはみな、離れて行き、だれもかれも腐り果てている。善を行なう者はいない。ひとりもない。

(4 節) 不法を行なう者らはだれも知らないのか。彼らはパンを食らうように、わたしの民を食らい、主を呼び求めようとはしない。

(5 節) 見よ。彼らが、いかに恐れたかを。神は、正しい者の一族とともにおられるからだ。

(6 節) おまえたちは、悩む者のはかりごとをはずかしめようとするだろう。しかし、主が彼の避け所である。

(7 節) ああ、イスラエルの救いがシオンから来るように。主が、とりこになった御民を返される時、ヤコブは楽しみ。イスラエルは喜べ。

次に詩篇 53 篇を詩篇 14 篇と比較しながら注意深く読んでいただきたい。

(1 節) 愚か者は心の中で「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい不正を行なっている。善を行なう者はいない。

(2 節) 神は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。

(3 節) 彼らはみな、そむき去り、だれもかれも腐り果てている。善を行なう者はいない。ひとりもない。

(4 節) 不法を行なう者らは知らないのか。彼らはパンを食らうように、わたしの民を食らい、神を呼び求めようとはしない。

(5 節) 見よ。彼らが恐れのないところで、いかに恐れたかを。それは神が、あなたに対して陣を張る者の骨をまき散らされたからだ。あなたは彼らをはずかしめた。それは神が彼らを捨てられたからだ。

(6 節) ああ、イスラエルの救いが、シオンから来るように。神がとりこになった御民を返される時、ヤコブは楽しみ。イスラエルは喜べ。

この二つの詩篇の内容は、ほとんど同じである。ただし、一つの大きな違いがある。詩篇 14 篇の 2 節、5 節、6 節、7 節に出てくる「主（四文字語）」という言葉が、詩篇 53 篇の 2 節、4 節、5 節、6 節においては、「神（エロヒーム）」に置き換えられている、ということである。その結果、14 篇にあった四文字語が、53 篇の方ではすべてなくなってしまっている（これは、ヘブライ語の原典に基づいている）。

ところが、『新世界訳』ではそうになっていない。詩篇 14 篇には「エロヒーム」が 3 回出てきたのに、みな「エホバ」に変わっている。53 篇ではもともとすべてが「エロヒーム」だったのに、5 箇所「エホバ」に直され、2 節と 5 節の 2 箇所だけは「エロヒーム」が残されている。

『参照資料付き聖書』（1754 頁）は、「ギンス、368, 369 頁によると、ユダヤ人のソフェリムは幾つかの箇所で四文字語をエロヒームという語に置き換えました。わたしたちは 8 か所、すなわち詩篇 14 篇 1 節、2 節、5 節、53 篇 1 節、2 節、4 節、5 節、6 節で元の読み方を復元し、それをエホバと訳出しました」と説明している。

では、どうしてこれらの 8 箇所において、「エロヒーム」を「エホバ」に修正したのか。それについて『新世界訳』は、それぞれの聖書箇所の下に注をつけ説明している。詩篇 14 篇 1 節、2 節、5 節、詩篇 53 篇 1 節、5 節のそれぞれの注には、「書写の際 YHWH がエロヒームに変えられた 8 箇所の一つ。付録 1 口参照」とある。付録 1 口の解説を見ると、その聖書箇所を見よと言われているだけで、変更した理由を述べていない。いわゆる循環論法であって、これでは何の説明にもなっていない。

ただし詩篇 53 篇 2 節ではタルグムが、53 篇 4 節ではタルグムといくつかのヘブライ語写本が、そして 53 篇 6 節ではタルグム、七十人訳、シリヤ語、多くのヘブライ語写本が「エホバ」

となっていることを説明している。

タルグム、七十人訳、シリヤ語訳などは、旧約聖書が正典として確立されてから後のものである。そのような書物に基づいて聖書の語句を変えてしまうことは、聖書を勝手に変更してしまうことと同じである。それは申命記 4 章 2 節の「あなた方は、わたしが命じている言葉に付け加えてはならず、それから取り去ってもならない」という命令に反する。

では、詩篇 53 篇でなぜ 2 箇所だけは、「エロヒーム」とそのままにし、「エホバ」に変えなかったのか、その理由は筆者には分からない。いっそのこと、すべてを「エホバ」に変えた方がすっきりするはずなのに。

ところで、詩篇 14 篇は個人的な信仰の告白として、より古い年代に作られたものである。一方詩篇 53 篇は、個人的だった詩を公同の信仰告白に合うよう直されたものである。もしこのように、「エホバ」を「神」に置き換えることを、靈感を受けた聖書記者たちがしていたとしたら、今のものみの塔のリーダーたちがしていることと正反対のことをしたことになる。

もし、聖書記者が状況に応じて神のみ名を変える必要があったとしたなら、ここから大きな教訓を得ることができる。神のみ名は状況に応じて使い分けてよい、否、使い分けるべきだ、ということである。もしそうであるなら、イエスの弟子たちが新約聖書を記したとき、四文字語を「主」と訳していた七十人訳ギリシャ語旧約聖書をそのまま引用したとしても、それは背教的なことではない。むしろ、福音が異邦人世界に広く伝えられるためのよりよい方法だったのである。

七十人訳には四文字語がそのまま残されていたのか？

七十人訳ギリシャ語聖書のファド 266 という写本をはじめ、いくつかの七十人訳の写本には四文字語が出てくる。『参照資料付き聖書』はそのデータを詳しく紹介している。しかし、これらの事実から、新約聖書の著者たちが四文字語を使ったと結論付けるのは早急である。

七十人訳旧約聖書において四文字語がどのように取り扱われたのかという問題は、とても興味深いテーマである。今日七十人訳の写本がたくさん見つかっており、その研究成果も公表されつつある。結論から言うと、この問題は、ものみの塔が主張するほど簡単なことではない。

例えば、死海写本の中にレビ記の断片的な写本 (4Q LXX Levb) がある。それは紀元前 100 年頃のもので、おそらくファド 266 号より古い、世界最古の七十人訳の写本であろう。その写本では四文字語はなく、四文字語を「イアオ」というギリシャ語で表わしている。だから、イエスの弟子たちがギリシャ語聖書を書くときに使用したと思われる七十人訳には四文字語が残されていた、などと簡単には言い切れないのである。

最近発見された死海写本においては、旧約聖書で四文字語が出てくるところに「アドナイ」という文字が当てられており、その上に線が引かれて四文字語が書き換えられている箇所がある。なぜこんなことが起こったのか。おそらくそれは、筆記者が口述筆記を基にして書いたため勘違いして書いてしまったので、その後他の人が訂正したということなのだろう（そう考えると、すべてがよく説明がつく）。

死海写本のイザヤ書を見る限り、四文字語はすべて「アドナイ」と発音されていたと考えるのがよさそうである。もともとのヘブライ語のテキストにおいては四文字語が出てくる箇所において、死海写本では「アドナイ」となっている箇所が多数ある。ものみの塔の文献がよく引

用するハワード教授は、イザヤ書の死海写本において四文字語と「アドナイ」の二つの言葉が混同して出てくる現象は、写本を筆記させた人が「四文字語」と「アドナイ（ヘブライ語の主）」の両方を同じ発音「アドナイ」で読んだ。それを聞いて筆記していた筆記者は、そのときそのときに自分の頭に浮かんだ方の言葉を書き留めた、と推測している。これは死海写本の権威者ミラー・バロウズの見解であるが、おそらく当たらずとも遠からず、と言うところであろう。

死海写本の『ハバクク書注解』（これはヘブライ語で記されている）では、聖書本文には四文字語が使われているが、注解の方では「神（エル）」と言い替えられたり、4つのドットで四文字語が表されている。これは四文字語を使うことは恐れ多いことだと考えられた痕跡である。

ものみの塔の反論

エホバの証人の中には、四文字語が「アドナイ」と呼ばれていたことは信じにくいと、抵抗を覚える人がいるだろう。しかしそういう人は、今日のユダヤ人もまた同じように、四文字語を「アドナイ」と読んでいることを考えてみるとよい。旧約聖書において、四文字語はあまりに尊重され、畏敬の念を持たれていたもので、ギリシャ語に訳されたとき、いつでもすんなり「キュリオス（主）」という言葉に翻訳されたわけではなかったのである。

『参照資料付聖書』（1756頁）は、新約聖書研究家ジョージ・ハワード教授の考えを組織の教えを保証するものとして次のように紹介している。

「新約における旧約〔聖書〕の直接および間接引用箇所には当初、神の名が記されており、時を経るうちに、それがおもに代用語クス〔「主」を意味するキュリオスの省略形〕に置き換えられたというものである。我々の見解からすると、四文字〔語〕がこうして除かれたことにより、初期の異邦人の思いの中に『主なる神』と『主なるキリスト』の関係について混乱が生じた。このことは、新約本文そのものの伝承に反映されている。」

確かにハワード教授は、新約聖書に四文字語が残されていた可能性を仮説として提唱している。しかしものみの塔がハワード教授の文書王を引用するとき、ハワード教授が言わんとすることを曲解し、きわめて不正確なかたちで引用する。従って、ハワード教授は、「七十人訳ギリシャ語聖書において四文字語が出てくるとそれを発音したことは区別しなければならない」とわざわざ断わり書きをしている。この断り書きこそ、エホバの証人が真摯に受け止め、引用しなければならない文章である。

旧約聖書がギリシャ語に翻訳されたとき、四文字語が訳されずにそのまま残された可能性はある。その場合、それは神に対する恐れ、敬虔な態度からであった。『洞察』（一卷 392頁）は、ユダヤ人が神の名を使わなくなったのは迷信的な理由からだったと述べている。しかしこれは間違いである。ユダヤ人が神のみ名を唱えなくなった理由はあくまでも「十戒」の中の三戒、出エジプト 20章 7節の「あなたの神エホバの名をいたずらに取り上げてはならない。その名をいたずらに取り上げるものをエホバは処罰せずにはおかないからである。」に基づいていた。決して迷信からではない。

ユダヤ人がエホバのみ名を使わなくなったのは、エホバ神を恐れ、不敬虔な態度でみ名を使うことにより、み名を辱めてはいけないとの気づきからだった。もし七十人訳において翻訳者たちが四文字語を翻訳せずにそのまま残したとしたら（そのようなケースもあったであろう）、その理由は四文字語を神聖視し、翻訳することをためらったことによる。他の言葉に訳

すことなどともない躊躇したわけである。

使徒たちが使った七十人訳には四文字語が残っていたか

使徒たちは、旧約聖書を引用するのに自分たちで直接訳した場合もあるが、七十人訳を使った場合もある。その七十人訳には、四文字語は残っていたのだろうか。ものみの塔はむしろ「イエス」と言う。『参照資料付き聖書』（1755頁）にその証拠が載せられているので、ここでは提示されている資料の一つ一つを検証しておこう。

まずナンバー1のファド266の写本である。これについてはすでに触れた。

ナンバー2はどうか。その写本は一世紀末のものである。そのナンバー2のすぐ後の「七十人訳」という言葉の右上に、VTS 10a とある。それは、この写本については、Supplements to Vetus Testamentum vol. x(1963) pp. 170-78 の論文に詳しい説明があるという意味である。

その論文によれば、この写本はユダヤ人たちによって七十人訳の標準本が作られる過程の中で生まれたものである。その翻訳においては、ヘブライ語に字義的に対応するよう訳された。

もう少し詳しく説明すると、一世紀から二世紀のキリスト教徒たちは七十人訳ギリシャ語旧約聖書を重要視するようになった。その結果ユダヤ人たちは、七十人訳を軽視するようになり、旧約聖書のヘブライ語標準テキストを作成することに力を注いだ。そのヘブライ語旧約聖書が確立すると、ギリシャ語訳もまたそのテキストに合わせる必要が生じ、七十人訳の改訳作業がはじめられた。その際、ユダヤ人たちは、ヘブライ語にできる限り忠実な訳にしようと努力した。神のみ名を古代ヘブライ文字で表わすということもその一つだった。従って、このナンバー2の写本は、イエスの弟子たちが使用した七十人訳とは違うものである。この写本に四文字語が出て来ることを根拠に、新約聖書に四文字語が出て来ることを証明しようとするのは愚かなことなのである。

ではナンバー3についてはどうなるのか。これもまた、一世紀のものである。この写本については、右上の記号 IEJ 12 から明らかであるように、Israel Exploration Journal vol. 12 (1962) pp. 201-7 にその説明がある。

この写本は、ホセア書2章8節、アモス書1章5節、ヨエル1章14節、ヨナ3章2-5節、ナホム書2章8-9節、ゼカリヤ3章1-2節、4章8-9節、8章21節が含まれている。そこに見られる訳文を検討するなら、七十人訳の訳語をヘブライ語テキストに戻そうとする傾向が随所に認められる。この論文の執筆者ヘブライ大学の B. Lifshitz 教授は「この写本は新しい翻訳でも、独立したものでもなく、むしろ、七十人訳を元の文に戻そうとしたものである。七十人訳と訳語が違っているのは、ヘブライ語の原典に忠実であるよう訳し直そうとしたからである」というバルテレミーの結論を支持している。

その写本のヨナ3章3節には、四文字語は出てくる。しかし、ゼカリヤ4章8節は、普通の七十人訳では「キュリオス（主）」であるが、「テオス（神）」になっている。ナホム1章9節も同じ。結局この写本では、一か所で四文字語が出てくるが、他では「テオス（神）」で一貫していない。

ナンバー4については、右上に VTS 10b とある。この写本は、結局ナンバー2と同じものである。『新世界訳』がどうしてこの写本とナンバー2とを区別しているのか分らない。つまり、ナンバー2で言ったことはすべてこの写本に当てはまる。

ナンバー5はどうか。これについては別の機会に明らかにした。ここでは四文字語が出てくるのではなく、ギリシャ語の「イアオー」が出てくる。「イアオー」は四文字語の発音をギリシャ語で表現したものである。ということは、もし四文字語が発音されたとしたら、「イアオー」だったということである。しかしそれは、人々が四文字語を日常的にそう読んでいたことを意味しない。というのは、この写本の所有者であったクムランの人々が四文字語を「アドナイ」と読んでいたことは、他の死海写本の証拠から明らかだからである。

ナンバー6は三世紀のものようである。ここでは、『新世界訳』で紹介されているアーサーハント自身の解説を引用しておく。

「七十人訳では通常現れるいわゆる四文字語は、驚嘆すべき省略形で表されている。...「キュリオス」という言葉を除こうとする傾向は初期の『オクシリクスパピルス (656)』に見られる。ある箇所ではもともと空白にしておき、他の人によって埋めるようになっていた。」この写本では、四文字語はゼットに線を入れたような文字を二つ並べることによって表されている。それは三世紀の筆者たちによる四文字語の省略形である。その文字はギリシャ語の写本家たちではなく、別の特別な人々によって後から補われたようである。

ナンバー7とナンバー8はアキュラによるギリシャ語訳の写本であり、五～六世紀のものである。アキュラは、ヘブライ語に忠実なギリシャ語訳を作ろうとしたのである。七十人訳の権威者イマヌエルトブ博士は次のように述べている。

「アキュラは後125年頃に改訳の準備をした。彼は一部の書の改訳では二つの「版」を出したが、その間の関係は知られていない。アキュラは聖書へのアプローチでは師のラビアキバを踏襲している。後者の体系によれば、聖書の中の語はすべて意味があり、それゆえに、アキュラはすべての語や小辞、そして形態でさえ正確、かつ別個に表そうとした。」

ナンバー9はスュンマコス訳である。この訳は、紀元200年頃、七十人訳に満足しないユダヤ人たちのために翻訳された。これもアキュラと同じように、七十人訳とは別の翻訳である。

ナンバー10は、『新世界訳』の資料を読めば分るように、九世紀のもので、いろいろな七十人訳の読み方を編纂したものにはすぎない。

以上の事柄から分かるように、『新世界訳』が証拠としてあげているこれらの写本は、使徒たちが新約聖書を書くときに使った七十人訳に四文字語があったことを証明するものではない。

以上で本小論を終わる。

結論

私たちはこれまで、エホバの証人が「キリスト教世界は、「エホバ」という神のお名前を使わないことが背教しているしるしである。イエスに忠実に従おうと思うのであれば、神名を使わねばならない」と主張していることについて考えてきた。そしてこれまでの論述から、以下のような結論が明らかになったと思う。

①ものみの塔の組織は、そのはじめ(1839年)から「エホバ」を重要視してきたのではなく、途中(1931年)からだった。

②「エホバ」という神名は、神がイスラエルの民と契約を結ばれたときの神名であって、ユダヤ人が使うにはふさわしい神の名前である。

③四文字語は元来「ヤハウエ」または「ヤーウエ」と発音されていたが、ユダヤ人の間では「アドナイ」と発音されるようになった。

④「エホバ」という言葉は、12世紀頃四文字語の子音に「アドナイ」の母音符号がつけられて出来上がった人造語だった。

⑤ものみの塔が出版している『新世界訳』は、新約聖書の237箇所にはいかなる古代の写本にもない「エホバ」という言葉を挿入している。

⑥イエスとイエスの弟子たちは、神との新しい関係（父と子の関係）を与えられたので、祈りのとき「エホバよ」とは祈らず、「父よ」と祈った。

⑦一世紀のユダヤ人たちは、十戒の三戒を忠実に守ろうとして四文字語を恐れるあまり、四文字語を発音しなくなっていた。

⑧イエスは、四文字語に当たる「エゴーエイミ」という言葉でご自分のことを明らかにされた。

結局イエスの契約にあずかったキリスト者は、「エホバ」という神名を使う必要はない、これが本小論の結論である。このことをエホバの証人たちが気づくことを願って、本書を閉じたいと思う。